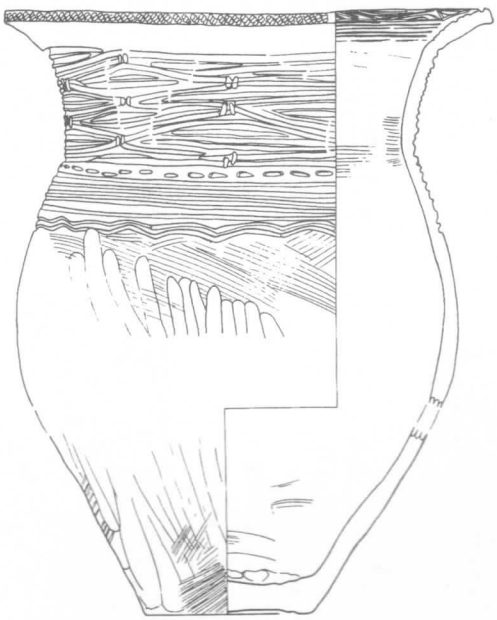
和島村埋蔵文化財調査報告書第６集

松ノ脇遺跡

－県営圃場整備事業（桐島・桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書－



１９９８

新潟県和島村教育委員会

序

松ノ脇遺跡の発掘調査は現在進行中の県営圃場整備事業（桐島・桐原地区）に伴う事前調査として平成９年に行われました。本書はその成果を発掘調査報告書としてまとめたものであります。

和島村では、奈良・平安時代の遺跡が有名ですが、弥生時代の遺跡も確認されています。そのひとつが今回報告された松ノ脇遺跡です。残念ながら集落などの遺構は確認されませんでしたが調査の結果、弥生時代中期を中心に櫛描文土器など多くの遺物が発見されました。また、東北地方や信州など中部高地の土器がかなりの割合で出土しました。現在、北陸地方として認識される新潟県でこのような土器が見られることは、当時の和島村がどのような歴史的環境にあったのか非常に興味深いものがあります。

これらの成果が本書によって広く活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解とその啓発の一助になれば幸甚であります。

なお、この度の発掘調査に当たりまして、調査に同意くださいました地権者の方々、および長期間にわたりご厚意とご理解、ご支援をいただいた、長岡農地事務所・三島北部土地改良区・県文化行政課、関係諸機関に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成10年３月

和島村教育委員会
教育長　若　井　　勇

例　　言

1　本書は、新潟県三島郡和島村大字三瀬ヶ谷字松ノ脇に所在する、松ノ脇遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は県営圃場整備事業（桐原地区）に伴うもので、和島村が新潟県から受託して実施した。

3　遺物の注記は、「松ノワキ」とし、他に調査区名・グリッド名・層位等を記した。

4　調査に要した経費は、農政部局が90.0%、文化財保護担当部局が10.0%を負担した。文化財保護担当部局分については、国庫及び県費の補助金交付を受けた。

5　整理作業参加者は以下の通りである。（五十音順）

小田富美子、久住幸江、近藤保、坂上有紀、関川たづ子、高橋智子、早川雅子、山口八千代

6　本書の執筆は丸山一昭が担当した。

7　調査体制は以下の通りである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	若井　勇
調査指導	新潟県教育庁文化行政課		
調査担当	和島村教育委員会	文化財調査員	丸山一昭
調査員	〃	主事	田中　靖
事務局	〃	事務局長	矢部政夫

8　発掘調査については酷暑の中、大字上桐及び島崎有志の協力を得て実施した。また発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々にご教示・ご協力を賜った。ここに厚く御礼を申し上げる。（五十音順、敬称略）

伊藤啓雄　　金子正典　　竹内　裕　　立木宏明　　渡邊朋和　　三島北部土地改良区

新潟県長岡農地事務所

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　遺跡周辺の環境 …… 1
　1．地理的環境 …… 1
　2．歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の概要 …… 3
　1．調査に至る経緯と経過 …… 3
　2．調査の方法と調査区 …… 3
第Ⅲ章　発掘調査の成果 …… 4
　1．基本層序 …… 4
　2．遺構 …… 4
　3．遺物 …… 4
第Ⅳ章　まとめ …… 14
参考文献 …… 17

挿 図 目 次

図１　周辺の遺跡
図２　調査区設定図
図３　土層柱状図
図４　１区Ⅵ層石器類出土分布図

表１　出土土器観察表
表２　口縁部施文表
表３　石器観察表
表４　層位・石材別出土点数及び重量表
表５　１区Ⅵ層地点・石材別出土点数及び重量表
表６　中期後半の編年試案

図 版 目 次

（図面図版）
図版１　調査区実測図（１）
図版２　調査区実測図（２）
図版３　１区出土土器（１）
図版４　１区出土土器（２）
図版５　２区出土土器（１）
図版６　２区出土土器（２）
図版７　２区出土土器（３）
図版８　２区出土土器（４）
図版９　２区出土土器（５）
図版10　２区出土土器（６）
図版11　２区出土土器（７）
図版12　２区出土土器（８）
図版13　２区出土土器（９）
図版14　３・４区出土土器
図版15　松ノ脇遺跡出土石器

（写真図版）
写真図版１　遺跡遠景・完掘状況
写真図版２　１区 (1)
写真図版３　１区 (2)
写真図版４　２区
写真図版５　出土土器 (1)
写真図版６　出土土器 (2)
写真図版７　出土土器 (3)
写真図版８　出土土器 (4)
写真図版９　出土土器 (5)
写真図版10　出土土器 (6)
写真図版11　出土石器

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

和島村は新潟県のほぼ中央、日本海沿岸に立地する。東、西、南の三方を丘陵に囲まれ、三島山地から派生する東側丘陵・島崎川沿いの沖積低地・海岸に面した西側丘陵に分類できる。標高200～350ｍの東側丘陵は島崎川右岸、信濃川左岸に面し、その先端は北々東の弥彦・角田山麓に連なる。沖積低地を作った島崎川は、出雲崎町南部から和島村西北部に流れ、かつては分水町の西川に流れていたが、現在では大正13年に掘削された大河津分水に合流している。西側丘陵は東側丘陵に比べ標高は低く、100ｍ前後である。日本海側は海蝕が著しく急な崖を形成している。松ノ脇遺跡は東南から北西に伸びる東側丘陵の末端部に所在し、標高25～30ｍである。現況は畑、山林、及び水田である。畑では現在でも遺物の散布が認められる。

2. 歴史的環境

和島村で人間の生活跡が認められるのは、旧石器時代からである。八幡林遺跡、上桐神社裏遺跡、オクマンサマ遺跡で遺物が確認されているが、いずれもわずかな量で詳細は不明である。八幡林遺跡ではナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡は十数遺跡確認され、それぞれ前期から晩期(約6,000～2,500年前)に位置付けられる。代表的な遺跡としては、大武遺跡(前～晩期)、高稲場遺跡(中期)、十二遺跡(後～晩期)がある。遺跡の立地はほとんどが丘陵上であるが、大武遺跡のように沖積地約５ｍ下の埋没谷からも発見されている。これらの遺跡では、集落跡は確認されていないがまとまった遺物が出土しており、存在する可能性は高いだろう。

弥生時代の遺跡が確認できるのは中期後半以降である。北陸地方の日本海沿岸部で盛んな玉作りは、和島村周辺でも行われていた。大武遺跡、大平遺跡や近隣の柏崎市下谷地遺跡、寺泊町諏訪田遺跡では、管玉製作工程が分かる一連の資料が出土している。後期後半になると遺跡数が増加する。新潟県全域でこの傾向が認められ、「倭国大乱」に連動して高地性集落や環濠集落が各地に成立する。佐渡新穂玉作遺跡(中期～)、新津市八幡山遺跡・長岡市横山遺跡・新井市斐太遺跡群・長岡市横山遺跡(後期)など、各地に中核的な集落が存在する。和島村では、上桐神社裏遺跡、大平遺跡、赤坂遺跡、松ノ脇遺跡などが、いずれも島崎川右岸の丘陵上に立地し、相互に有機的な関係にあった。やがて高地性集落遺跡群は後期終末に廃絶され、在地首長を葬ったと見られる下小島谷古墳群が古墳時代初頭に造営される。

古墳時代の遺跡では、島崎川の低位丘陵でも確認される。弥生時代後期終末から継続する遺跡は僅かで、古墳時代以降営まれる山田郷内遺跡、下ノ西遺跡、門新遺跡などは、島崎川沖積地の微高地上に位置し積極的に低位地の開発が行われ、後の古志郡の拠点となった。

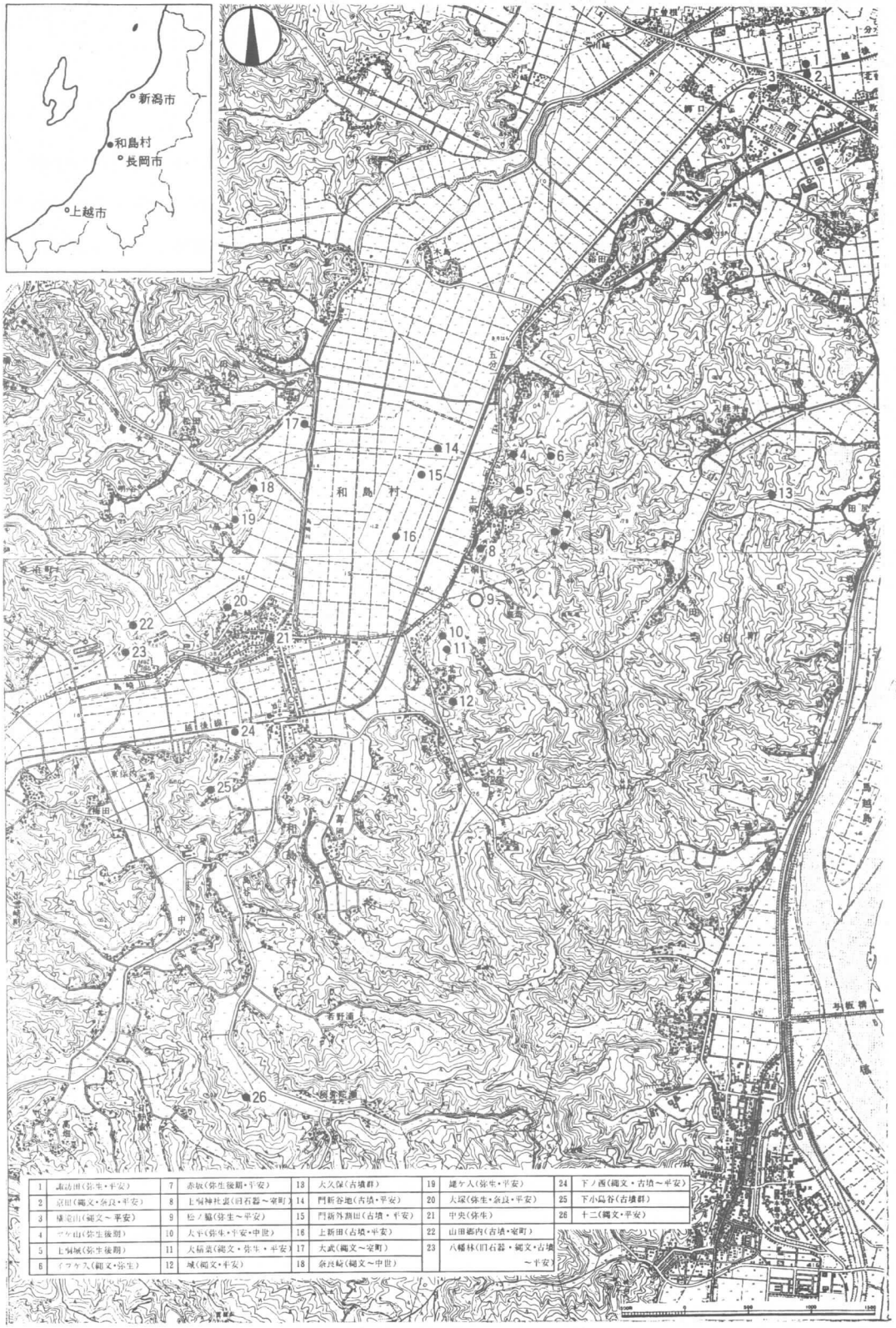


図1　周辺の遺跡（国土地理院1:2500　地形図「寺泊」「与板」より抜粋）

第Ⅱ章　調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

松ノ脇遺跡は、新潟県三島郡和島村大字三瀬ヶ谷字松ノ脇に所在する。丘陵上は畑及び山林で以前から遺物が採集されていた。平成９年度の県営圃場整備事業で、これに隣接する水田部が対象地区となったため、試掘調査を1997年４月10、11日に行った。この結果、主に弥生時代の遺物が出土し本調査を必要とすることとなった。長岡農地事務所との協議により、調査範囲は排水路・道路設置部分とし、実質的な発掘調査面積は約800㎡であった。

本調査は５月29日に着手した。調査は１区から順次行い、Ⅴ層確認面まで掘り下げた。その結果、一定量の遺物と遺構が少数であるが検出された。６月中旬に入ると梅雨による大雨に見舞われ、調査区は何度か水没し調査区壁面が崩れかけた箇所もあった。また、終始湧水のため排水溝とポンプを設置しなければならず、土層観察などにおいてやや困難を伴う調査となった。

１、２区においてⅤ層より下層でも遺物が存在することが断ち割りの結果判明し、さらに掘り下げたところ多量の弥生土器が密集して出土した。１区についてもⅤ層を掘り下げるとやはり遺物が検出された。その後７月25日に図面作成を終了し機材撤収を行った。

発掘終了後、注記、接合、復元作業を行った。遺物の洗浄は雨天時を利用して行ったため、それほど日数を要せずに整理作業に移ることができた。全調査区の遺物量は平箱にして約10箱程度である。遺存状態の悪いものについてはバインダー処理を行い補強した。その後、実測、拓本、トレースを12月一杯まで行った。また遺物写真の撮影は翌年の２月中旬に行った。

2. 調査の方法と調査区

耕作土を重機で除去した後、すべて人力で掘り下げた。作業員数は一日当たり約25人程度である。調査区の現況は水田で、掘削に伴う湧水を防ぐため排水溝の掘削を随時行った。調査区の幅が狭く、かつ深く掘ることの危険性の回避から１区は段堀とした。グリッドの方向は１区法線の長軸方向(W８-１・W８-２)に合わせて設定した。基準点はW８-２(X＝175319.301　Y＝25739.859)とし、それに直交する20ｍ間隔の大グリッドと５ｍ間隔の小グリッドを設定して行った。遺物の取り上げは１、２区については各層位・グリッド毎に行い、ほかの調査区では出土範囲が狭く、遺物も少数であったためグリッドは設定せず、各層位ごとに一括で行った。また、遺物の取りこぼしを最小限に防ぐため排土の水洗も行った。完掘したところで順次平面図と土層断面図を作成した。記録写真は遺跡近景・調査区全体・土層・遺構・遺物等である。

第Ⅲ章　発掘調査の成果

1. 基本層序（図3）

現況は水田であるが以前の耕地整理で丘陵部分が削平され、基盤層（黄褐色土）が耕作土直下に見られる箇所もある。また、耕地整理以前は入り組んだ沢が幾つもあったようで起伏に富んだ地形をしている。包含層は丘陵裾付近では貧弱で、分層が困難な箇所もある。しかし、基本的にはⅠ～Ⅶ層に区分でき、いずれも自然堆積である。上位から、耕作土（Ⅰ層）、黒褐色泥炭層（Ⅱ層）、茶褐色泥炭層（Ⅲ層）、炭粒を含む暗灰色粘土層（Ⅳ層）、青灰色砂質土層（Ⅴ層）、炭粒を多く含む暗灰色粘土層（Ⅵ層）、青灰色粗砂層（Ⅶ層）となる。Ⅴ、Ⅶ層は遺物を含まない間層である。主にⅢ層は奈良・平安時代以降、Ⅳ層は古墳時代前期、またⅥ層は弥生時代中期後半の遺物包含層である。

2. 遺　構（図版1・2　写真図版2・3）

溝2条（ＳＤ1、2）と杭列と思われるものが1区Ⅴ層上面で検出された。調査範囲が狭いため各遺構同志の関係は判然としない。ＳＤ1は1区中央をほぼ南北方向に走る。上幅で幅最大約2ｍ、深さ約16cmである。覆土上面から古墳時代前期の甕と器台が出土した。ＳＤ2はほぼ東西方向に走る。覆土は有機物の腐植層と砂層の互層で、下層にいくほど粗い砂が混じる。幅は最大約4ｍ、深さ約84cmである。出土遺物はクルミ殻などの植物遺体のほか、細かい土器片のみである。堀込みはⅤ層上面でⅣ層の古墳前期には埋没している。杭列は7本確認され、そのうちの4本は南北方向に約1.3ｍ間隔で伸びる。直径は15cm、長さ40cm前後であった。加工痕は腐蝕が著しく明確に認められなかった。確認面はⅤ層であるがⅣ層中から打ち込まれた可能性もある。従って、所属時期は古墳時代以降と思われる。1区ⅡＢ-4 Ⅵ層上面において炭化物集中部（クルミ殻片等含む）が検出された。また、ⅡＢ-2の土器集中部分は炭化物粒の密度が濃かったことから、性格不明遺構ＳＸ1としておく。

3. 遺　物（図版3～15、写真図版5～11）

(1) 各調査区の出土状況

各調査区から弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器が出土した。限られた調査区のため、面的に出土分布を抑えることが不十分であったが、特に1区及び2区で出土量が多かった。古墳時代以降の遺物は、少量で散布状態も散漫であった。中心は弥生時代中期後半の遺物で、Ⅵ層がその包含層で遺存状態も良好である。既にⅢ、Ⅳ層から弥生土器が出土し始めるが、Ⅵ層出土と同一個体のものがあり、また大半が細片で摩耗していることからこれらは再堆積と思われる。従って、ここではⅥ層における遺物の出土状態を中心に記述する。なお、1区と2区で

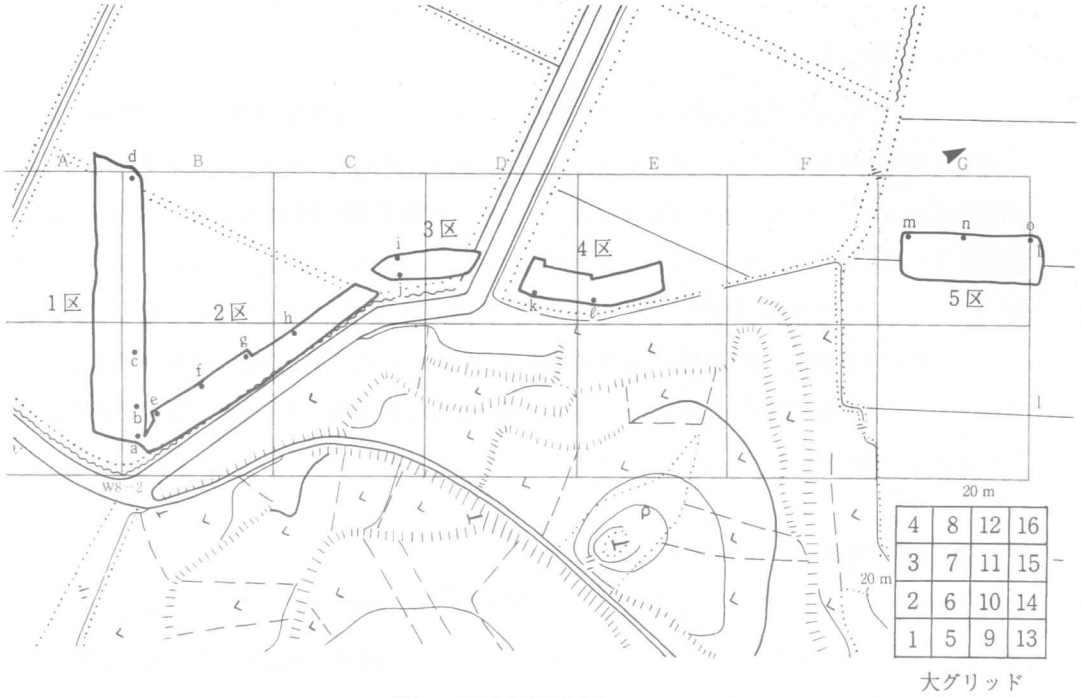


図2　調査区設定図

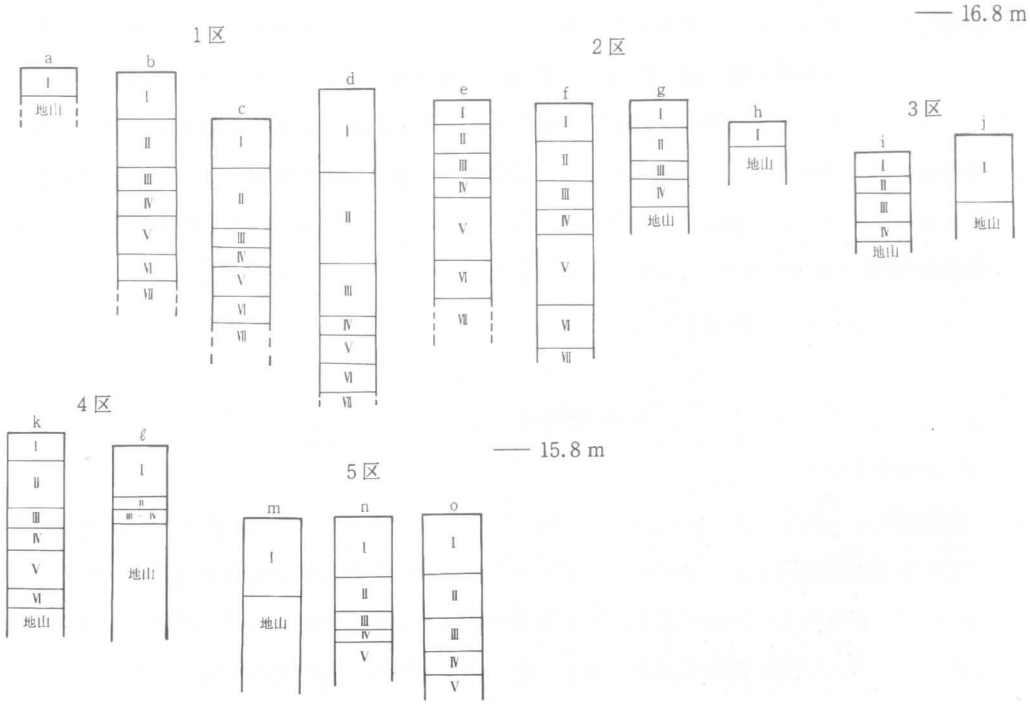


図3　土層柱状図(1/40)

は出土土器の主体が明確に異なるため別の層位とも考えられるが、上下の分層は不可能であったこと、レベルも大差ないことから同一層の出土と判断した。

1区　遺物は縄文を有する東北系の土器と石器が主体である。北陸系はハケメ調整の胴部及び底部片、中部高地系は口縁部及び胴部片が僅かに出土したのみである。調査区全体から遺物は出土しているが、Ⅱグリッドで出土密度が濃い。特にⅡB-2を中心に天王山式土器（1～15、19～21）、中部高地系(16)、石鏃(148)がまとまりをもち出土した。湧水など困難な状況で明確な遺構は確認できなかったが当地点は炭化物が特に多い。また、炭化物が付着した土器が多いことや、天王山式土器に伴うと考えられる被熱破砕した頁岩製の剥片・石屑が多量に出土したため、この付近で火の使用があった可能性もある。Ⅰグリッドの出土量が少ないのは後世の溝も影響しているためと考えられる。

2区　1区とは対照的に東北系、中部高地系の土器は一定量出土するが、北陸系が圧倒的に多い。遺物は丘陵削平部以外から一面に出土している。細片が多いものの復元率は高く44、46、121等はまとまった状態で検出された。

3区　調査区が狭く、包含層も薄いため遺物量は多くない。まとまって出土した中部高地系の甕(137)はⅣ層出土としたが、Ⅵ層の可能性もある。

4区　深い沢部分から少量出土した。壷(138)は、口縁部と胴部の一部を欠くほかはすべて残存していた。遺物の出土量から見て、4区までが遺跡の中心範囲と言える。

5区　遺物出土が散発的なため、Ⅴ層上面で掘削を終了した。また図示できる遺物は無かった。

(2) 出土遺物の概要

ここでは図示した主要な遺物について説明を加える。なお、未説明の個体の属性については観察表を参照頂きたい。

a．弥生土器

① 北陸系

ハケメ調整、口縁部の内外面ヨコナデ調整、ハケ原体による口縁部の連続刺突文、あるいは多様な櫛描文を特徴とする。後者は古い要素だが少量で、細片が多い。多くは口縁部のみに加飾が集約されるという新しい要素をもつ。柏崎市小丸山遺跡より更に後出的な時期と考える。

［甕］

A類　口縁部が短く、水平方向に折れ曲がる。胴部は張らない。口縁部下端にキザミを持つもの(104)と内面に綾杉状刺突を施すもの(97)がある。

B類　口縁部は緩やかに湾曲し、胴部は張らない。口径と胴部径は同程度か、それ以下である。無文で口縁端部が丸くなるもの(99、101)と面を取るもの(100)、加飾して押圧で波状となるもの(102)、綾杉状刺突を施すもの(139)がある。

C類　口縁部はくの字に短く開き、屈曲が強い。胴部は口径を上回る。口縁端部が丸くなるもの(80、81、94)、尖りぎみのもの(105)がある。

D類　口縁部がくの字で外反ぎみに開く。胴部径と口径が同じとなる。96、89ともに、口縁端部は丸くキザミを有しない。

E類　口縁部は短く直線的に開き、胴部は膨らむことなく垂直的に落ちる(87)。

F類　口縁部は外反ぎみで、肩部が張り口径を上回る(82)。口縁部は丁寧に面が取られ、下端にキザミを施す。ナデ調整は胴部まで及ぶ。

[壷]

A類　口縁部が短く上に立ち上がる短頸壷。無文のもの(109、111、112)と、キザミが施されるもの(108、110)がある。

B類　頸部が締まり、口縁部がラッパ状に開くもの(113)。

C類　口縁部が緩く開き胴部が球形になるもの(121)。内面には丁寧にハケメ調整がされ、底部から胴部に向かって螺旋状に仕上げているのが確認できる。

D類　口縁部のない胴部片を一括した。胴部最大径が約32㎝にもなる大型壷(125)、4本1組の平行線文と扇状文を交互に2段ずつ配し、赤色塗彩した装飾壷(126)がある。

[その他]

蓋(127、128、132、141)が4点出土した。132は内外面ミガキを施し、2個1対の孔がある。色調は黒色で胎土が北陸系のものと異なるので、中部高地系のものかもしれない。その外は蓋のつまみ部分である。133は細片であるが、口縁部が内弯していることから鉢とした。土製品では、土製紡錘車(130)、土錘(131)がある。

② 山草荷式土器

39は頸部が締まり胴部が球形の壷と思われる。外面には、頸部に2段の3本同時の沈線文と張付浮文が、胴部には渦巻文が施されている。また、内面の頸部付近には2本の沈線が残っている。40は胴部下半の附加条縄文が施されている。41は結節回転文を堺に縄文(ＬＲ)と渦巻文が施される。沈線文は非常に細く幅1㎜程度である。

③ 宇津ノ台式

44は宇津ノ台式の甕で短く開いた口縁部からほぼ垂直に頸部に至り、胴部で最大径を取り底部へと狭まる。口縁部はナデ調整で面を取り、口唇部にＲＬ縄文を押捺する。頸部には幅2㎜程の重菱形文を施し、その頂点に2個1対の刺突文が施される。頸部と胴部の堺には横方向の連続刺突文と5本の沈線文、2本の山形文がある。口縁部内面は2本の沈線間を重山形文で埋められ、頸部下端までは横方向にハケあるいは櫛状工具によると思われる調整がされる。胴部

下半外面も同様の調整がされた後、縦方向にミガキが入る。底面はケズリ調整である。

④　天王山式土器

器種には甕、壷があり各種文様・赤彩を有するもの(a類)とハケ・地文のみのもの(b類)がある。さらに、口縁部形態で細分される。a類は調整が丁寧であるのに対し、b類は概ね粗製で縄文とともにハケメを用いるものもある。原体は掲載図面中でＬＲ９点、ＲＬ14点である。

［甕］

A類　有段口縁状のもの。a類(1、37)とb類(4)がある。1は口縁部上半に交互刺突文が施される。端部のキザミは、一定間隔で方向を違えている。頸部から胴部上半は、下向きの連弧文によって区画され、その中にメガネ風の文様を描いている。磨消縄文はなく、地文(ＬＲ)が口縁部内面にも施される。37では口縁部下端に交互刺突文が、頸部には重菱形文が施される。突起を持つ口縁端部には、綾杉状のキザミが見られる。口縁部外面に地文(ＲＬ)を施す。b類は4のみである。外面に地文としてＲＬを施し、頸部はナデによって有段状を呈する。内面は器面調整が粗く、凹凸が激しく粘土のつなぎ目も見える。

B類　単純口縁でくの字状を呈するもの。a類(24)とb類(5、6、19)がある。24の口縁部は、1と同様、口縁部上半に交互刺突文が施される。端部は小突起と非常に細かなキザミが施される。また、内外面にＲＬ縄文が見られる。5は地文(撚糸Ｌ？)のみで、口縁端部に2ヵ所押圧が認められる。6は口径約25㎝の大型甕である。厚手の作りで内外面粗いハケメ調整の後、胴部と口縁端部にＲＬ縄文を加える。外面にはススが濃密に付着している。18はナデ調整のみの甕で内外面に炭化物が付着する。

C類　口縁部が内湾するもの。a類(9、25)とb類(30)がある。9は37と全く同じモチーフで同一個体の可能性もあるが、形態が異なるため別個体とした。25は2本の連弧文が巡る。口縁端部は刺突文が深く施される。縄文は無く、やや異質な感じを受ける。30は縞状にＲＬ縄文を施す。頸部はナデられ、刺突文が区画文として施されている。口縁端部は押圧が施される。

［壷］

A類　口縁部下端が肥厚し、有段状になるもの(11、12)。a類のみである。11の口縁端部には突起と格子状刺突が施される。外面には2本の山形文が巡る。内面は細い板状工具でナデられる。12は口縁部と胴部上半に連弧文、長い頸部には重菱形文が施される。突起を持つ口縁端部は特徴的で、直径約2㎜の棒状工具(竹管？)の小口で刺突、キザミ沈線を施している。地文に縦位のＲＬ、胴部内面はハケメ調整である。

B類　口縁部が逆ハの字で直線的に開くもの。a類(13、14)とb類(10)がある。10は胴部外面と口縁部内面の赤彩が認められる。口縁端部は突起とキザミを持つ。ＲＬ縄文を地文とし、頸部はナデで無文となる。13も10同様、内外面に赤色塗彩される。キザミと幅約3㎜の比較的

太い沈線が施されている。地文のＬＲ縄文は外面に施されている。14は肩部にＬＲ縄文が施され、頸部は無文帯となる。口縁部の文様帯は交互刺突文を欠く点を除き、甕１に類似する。

［折衷型式］

２の甕は胴部上半に２本１組の連弧文が施される。山草荷式、天王山式にもよく見られるが、器形は北陸系土器の甕に類似している。口縁端部はハケにより面取りされ、沈線が一本巡る所謂一本凹線状となる。外面はハケメ調整の後、縄文(ＲＬ)、連弧文の順に施文する。内面はナデに近い。縄文は縦走し、天王山式の特徴を備えている。138は頸部が細く胴部が下膨れの壷である。胴部には３段の渦巻文の下に山形文が描かれ、頸部には櫛描簾状文が施される。前者の文様は東北的(山草荷式的？)要素であるが類例は見当たらない。後者は櫛描文土器圏の技法だが、当遺跡では北陸系土器には無く中部高地系土器に見られる。

⑤　中部高地系

甕は口縁部がくの字のもの(45、46、48、137)、有段または受け口のもの(16、18、43、55、56)、外反するもの(51、54)がある。いずれの口縁部もヨコナデにより器面が滑らかなものが多い。46は頸部に８本の櫛描簾状文が巡り、胴部には縦の羽状文が重なり合って施される。48は口縁端部に簾状文、胴部に中部高地で一般的なＬＲ縄文が施される、小形の甕であるが類例はない。

壷は頸部が締まり長い胴部が下膨れになるもの(42、57)がある。57は頸部片で沈線間に節の細かい縄文(ＬＲ？)が充填され、縦方向に波状を呈する区画文を胴部に伴う。

ｂ．土師器

22は内湾する受部と脚部を持つことから東海系の高杯？と思われる。粘土帯を付加した肥厚した口縁部には、３本１組の棒状浮文、上端と下端に竹管文が施される。外面と受部内面は赤色塗彩される。23はくの字口縁の甕で胴部に黒斑がある。

ｃ．石器

全調査区から石鏃２点、石鏃未製品２点、打製石斧１点、不定形石器11点、角柱状剥片１点、ドリル１点、礫器２点が確認され、その内の前６者を図示した。147、148は玉髄製の有茎石鏃で共に長さ25㎜弱である。未製品の151、152は頁岩製である。150は先端が尖っていることからドリルとしたが、側縁を両面剥離しているので石鏃未製品の可能性もある。不定形石器は珪質頁岩が多く、鋸歯縁石器(149)、スクレイパー(153、155～157)がある。前者は両側縁に刃部を持つが、表裏一方向からの剥離で上下を折り取る。後者では157以外の刃部は一側縁のみである。158は頁岩製の打製石斧で刃部は著しく摩耗し、柄部には装着跡と思われる摩擦部分が見られる。154は管玉製作関連の緑色凝灰岩製角柱状剥片である。擦切溝は認められない。

表1　出土土器観察表

法量(cm) a：口径　b：胴部径　c：底部径・脚部径　Ⅵ層以外のものに限っては出土地点の後に( )で記した。

番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考	番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考
1	ⅡB-2ほか	東北	甕Aa	a:19 b:18	LR、ススL、交互刺突	33	IB-6	東北	胴部		連弧文
2	ⅡB-2、14	東北	甕	a:17.2 b:15	RL、ススL	34	IB-2、10	東北	胴部		LR、連弧文
3	ⅡB-3	東北			LR、ススL	35	IB-6(Ⅲ)	東北	口縁		交互刺突
4	ⅡA-13	東北	甕Ab	a:19.4	RL、海綿骨針	36	IB-6	東北	胴部		RL、ハケメ
5	ⅡB-2	東北	甕Bb	a:20	撚糸L？	37	IB-12	東北	甕Aa	a:20	RL、交互刺突
6	ⅡB-2ほか	東北	甕Bb	a:25.6	RL、ススL	38	IB-11	東北	胴部		RL、ハケメ
7	ⅡA-14	東北			LR	39	IB-6	東北	胴部		沈線文、渦巻文
8	ⅡA-16	東北				40	IB-7	東北	胴部		附加条
9	ⅡA-16	東北	甕Ca	a:16.2	RL、交互刺突	41	IB-6	東北	胴部		結節回転文
10	ⅡB-2	東北	壷Ba	a:16.3	RL、赤彩	42	IB-6	中高	壷	b:12.5 c:5.6	ミガキ、ハケ
11	ⅡB-1ほか	東北	壷Aa	a:12.8		43	IB-2	中高	甕	a:17	3本櫛描文、ススL
12	ⅡB-1,2	東北	壷Aa	a:16.8 b:21	RL、ススL	44	IB-6	東北	甕	a:19 b:17.2 c:6.8	RL、重菱形文 ススL
13	ⅡA-14	東北	壷Ba	a:16	LR、赤彩						
14	ⅡB-2	東北	壷Ba	a:16.6	LR	45	IB-6、11	中高	甕	a:32.4	RL、LR、4本櫛描
15	ⅡB-4	東北	壷？		LR	46	IB-11	中高	甕	a:16.6 b:19.2	6本櫛描文、ススL
16	ⅡB-2	中高	甕	a:21.8	LR、ススL	47	IB-6	中高	甕		LR、ヨコナデ、ススL
17	ⅡB-4	中高	胴部		タール	48	IB-6	中高	甕	a:9.8	LR、簾状文、ススL
18	ⅡA-16	中高	甕		櫛描波状文	49	2区	中高	甕	a:15	LR、ヨコナデ、ススL
19	ⅡB-2ほか	東北	甕	a:17 c:5.4	内外面炭化物	50	2区	中高	甕		ヨコナデ
20	ⅡB-1	東北	底部	c:10		51	IB-11	中高	甕	a:15.6	LR、櫛描波状、ススL
21	ⅡB-1ほか	東北	底部	c:7.6	ヘラナデ	52	2区	中高	甕	a:21.6	LR、ヨコナデ
22	SD01	－－	高坏?	a:15.2 c:14	赤彩	53	IB-12	中高	甕		ヨコナデ
23	SD01	－－	甕	a:18	胴部黒斑	54	2区	中高	甕	a:16	ヨコナデ
24	IB-6	東北	甕Ba	a:28	RL、交互刺突	55	IB-6	中高	甕	a:15.2	ヨコナデ、ススL
25	IB-6	東北	甕	a:29.2	ススL	56	IB-11	中高	甕	a:16.8 b:6.4	ミガキ、赤彩、ススL
26	IB-2	東北	甕？		LR、沈線文	57	IB-2	中高	壷		RL、ハケメ、ススL
27	IB-6	東北			LR、ススL	58	IB-11	中高	胴部		LR、刺突文
28	IB-6	東北			RL、ハケメ	59	IB-6	中高	甕		6本櫛描文、ススL
29	IB-6	東北	胴部		RL、ハケメ	60	IB-11	中高	胴部		櫛描波状文
30	IB-6	東北	甕Cb		RL、キザミ、刺突	61	IB-6	中高	胴部		5本櫛描簾状文、ススL
31	IB-6	東北	口縁		RL、ハケメ	62	IB-2	中高	胴部		沈線文、ススL
32	IB-11	東北	胴部		縄文、ハケメ	63	IB-6	北陸	底部	c:7.4	ハケメ

番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考	番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考
64	IB-6	北陸	底部	c:8.6	ハケメ、木葉痕	98	IB-12	北陸	甕	a:16.4	ススI
65	IB-6	北陸	底部	c:8.8	ハケメ、木葉痕	99	IB-11	北陸	甕	a:19	ススI
66	IB-6	北陸	底部	c:8	ハケメ	100	IB-12	北陸	甕	a:18	ススI
67	IB-6	北陸	底部	c:5.7	ハケメ	101	IB-11	北陸	甕	a:17.4	
68	IB-6	北陸	底部	c:6.4	ハケメ	102	IB-11	北陸	甕	a:21.6	ススI
69	IB-11	北陸	底部	c:4.8	ハケメ、ナデ	103	IB-10	北陸	甕？		ススI
70	IB-11	北陸	底部	c:4.8	ハケメ、ナデ	104	IB-11	北陸	甕	a:18.6	
71	IB-6	北陸	底部	c:7.6	ハケメ	105	IB-11(Ⅲ)	北陸	甕	a:13.6	
72	IB-11	北陸	底部	c:7.4	ハケメ	106	IB-12	北陸	壷？		ススI
73	IB-6	北陸	底部	c:5	ハケメ、ミガキ	107	IB-11	北陸	甕	a:19	
74	IB-11	北陸	底部	c:5.2	ミガキ	108	IB-6	北陸	壷	a:15	
75	IB-11	北陸	底部	c:5.2	ハケメ	109	IB-6	北陸	壷	a:15	ススI
76	IB-6	北陸	底部	c:5.6	ハケメ、ナデ	110	IB-6	北陸	壷	a:13.6	
77	IB-11	北陸	底部	c:5	ハケメ、ナデ	111	IB-7	北陸	壷	a:14.8	
78	IB-2	北陸	甕	a:23.4	ハケメ、ナデ	112	IB-6	北陸	壷	a:8.4 b:13.5 c:6.4 h:17.3	
79	IB-2	北陸	甕	a:18.4							
80	IB-6	北陸	甕	a:12.8		113	IB-6	北陸	壷	a:13.6	ススI
81	IB-6	北陸	甕	a:13.6 c:6.8	ススI	114	IB-11	北陸	壷	a:14.6	
82	IB-6	北陸	甕	a:13	ススI	115	IB-6	北陸	壷	a:16	ススI
83	IB-6	北陸	甕		ススI	116	IB-6	北陸	壷？	a:22	
84	IB-6	北陸	甕	a:16		117	IB-6	北陸	壷	a:14.2	
85	IB-6	北陸	甕	a:20	ススI	118	IB-6	北陸	壷	a:15	
86	IB-6	北陸	甕	a:16	ススI	119	IB-12	北陸	壷	a:19.4	非ヨコナデ
87	IB-6	北陸	甕	a:15.5	ススI	120	IB-6	北陸	壷	a:14.4	赤彩
88	IB-6	北陸	甕	a:21		121	IB-11	北陸	壷	a:8.4 b:13.3 c:5 h:15.7	
89	IB-7	北陸	甕	a:16.6	ススI						
90	IB-6	北陸	甕	a:20.4		122	IB-6	北陸	壷	a:13	
91	IB-7	北陸	甕	a:17.4	ススI	123	IB-11	北陸	突帯		格子状刺突
92	IB-11	北陸	甕			124	IB-11	北陸	突帯		綾杉状刺突
93	IB-11	北陸	甕	a:25.6	ススI	125	IB-7	北陸	胴部	b:30	
94	IB-11	北陸	甕	a:19.6	ススI	126	IB-11	北陸	胴部	c:6	4本櫛描文、赤彩
95	IB-11(Ⅳ)	北陸	甕	a:23.8		127	IB-12	北陸	蓋		
96	IB-11	北陸	甕	a:14	ススI	128	IB-11	北陸	蓋		
97	IB-11	北陸	甕		ススI	129	IB-7	北陸	不明	c:4.8	

番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考	番号	出土地点	系統	器種	法　量	備　考
130	2区		紡錘車			139	4区	北陸	甕	a:19.2	綾杉状刺突
131	2区		土錘			140	4区	北陸	口縁		ススI
132	IB-6		蓋	a:10.8	穿孔2カ所、ミガキ	141	4区	北陸	蓋		
133	IB-6	北陸	鉢？		ナデ	142	4区	北陸	口縁		
134	3区(Ⅱ)	北陸	甕	a:17.8		143	4区	北陸	底部	c:9	ススII
135	3区	北陸	甕？			144	4区	北陸	底部	c:9.6	
136	3区(Ⅲ～Ⅳ)	北陸	胴部		ボタン状突起	145	4区	中高	胴部		櫛描波状文
137	3区(Ⅳ)	中高	甕	a:13.4	5本櫛描文	146	4区	東北	胴部		LR、沈線文
138	4区	折衷	壷	c:5.6	櫛描簾状文						

表2　口縁部施文表

	無　文（丸）	無　文（面）	キザミ（外）	キザミ（内）	綾　杉	斜　短	キザミ＋綾杉	キザミ＋斜短	押　圧	計
甕	12	8	14	2	1	0	1	1	1	40
壷	3	1	2	4	0	0	1	0	0	11
計	15	9	16	6	1	0	2	1	1	51

（全てヨコナデ調整の口縁点数を示す。）

表3　石器類観察表

番号	出土地点	層	形　態	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
147	IB-3	Ⅵ	石鏃	玉髄	2.4	1.1	0.4	0.6	
148	IIB-1	Ⅵ	石鏃	玉髄	2.2	1.3	0.55	1.0	先端欠損
149	IIB-3	Ⅵ	不定形石器	珪質頁岩	2.5	2.4	0.6	4.2	鋸歯縁石器
150	IB-11	Ⅴ	ドリル	硬質頁岩	2.9	1.9	0.48	3.4	
151	IB-11	Ⅳ	石鏃未製品	頁岩	3.8	2.8	1.0	8.4	
152	3区	Ⅳ	石鏃未製品	頁岩	2.4	2.5	1.0	3.9	
153	2区	－	不定形石器	硬質頁岩	4.3	3.7	0.6	11.4	
154	2区	－	角柱状剥片	緑色凝灰岩	2.9	1.4	－－	4.8	
155	IB-11	Ⅵ	不定形石器	珪質頁岩	4.5	4.6	1.5	23.4	スクレイパー
156	IB-3	Ⅴ	不定形石器	珪質頁岩	7	3.8	0.8	29.8	スクレイパー
157	4区	－	不定形石器	硬質頁岩	4	3.8	0.8	6.9	スクレイパー
158	4区	Ⅲ	打製石斧	頁岩	8.2	6.3	1.5	67.5	使用痕

表4　層位・石材別出土点数及び重量表

	珪質頁岩	硝子質安山岩	玉　髄	珪化流紋岩	チャート	鉄石英	硬質頁岩	流紋岩	緑色凝灰岩	頁　岩	計
Ⅰ～Ⅴ層	1(29.8)		3(22.2)	1(8.2)	1(9.5)		5(40.8)	5(76.0)	4(16.4)	4(104.1)	24(307)
Ⅵ層	63(137.7)	7(33.0)	11(61.0)	2(32.2)	1(8.3)	3(29.2)	3(9.4)	1(2.7)			91(313.5)
計	64(167.5)	7(33.0)	14(83.2)	3(40.4)	2(17.8)	3(29.2)	8(50.2)	6(78.7)	4(16.4)	4(104.1)	115(620.5)

(　)内は重量(g)・空欄は無し

表5　1区Ⅵ層地点・石材別出土点数及び重量表

	珪質頁岩	硝子質安山岩	玉　髄	珪化流紋岩	鉄石英	硬質頁岩	流紋岩	計
ⅠB-3			1(0.6)					1(0.6)
ⅡB-1			1(1.0)					1(1.0)
ⅡB-2	16(39.0)	1(7.3)	5(20.8)		1(15.2)			23(82.3)
ⅡB-3	1(4.2)		2(31.0)		1(5.5)			4(40.7)
ⅡB-4		2(13.8)						2(13.8)
ⅡA-13				1(8.3)				1(8.3)
ⅡA-14	41(59.5)	1(1.1)	1(0.8)		1(8.5)	3(9.4)	1(2.6)	48(81.9)
ⅡA-15	2(9.8)	1(1.7)						3(11.5)
ⅡA-16	2(2.2)	2(10.0)						4(12.2)
計	62(114.7)	7(33.9)	10(54.2)	1(8.3)	3(29.2)	3(9.4)	1(2.6)	87(252.3)

(　)内は重量(g)・空欄は無し

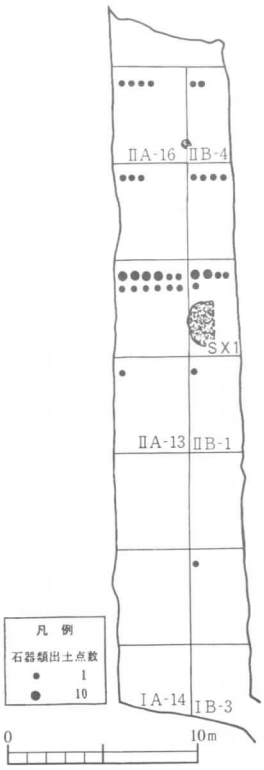


図4　1区Ⅵ層石器類出土分布図

第Ⅳ章　まとめ

前章の検討により本遺跡出土の弥生土器は、時期幅をもち下谷地～小丸山段階まで、中部高地系土器における栗林式～百瀬式頃に比定でき、一括性に不安が残る。これは本調査区の性格が、言わば土器捨て場のようなものであるからと考えられる。ただ現状では当該期の土器様相は不鮮明であり、その一端を明らかにする試みは有効であろう。県内における中期後半の編年は、柏崎市下谷地遺跡・同小丸山遺跡出土資料により、小松式から磯部式併行期（畿内Ⅲ様式）までが設定されている。しかし、それ以降の凹線文土器が波及する戸水Ｂ式（Ⅳ様式）併行期の存在は、想定されながらも不明であった[高橋 1990]。そこで、今回の資料により新しい要素を抽出し、小丸山遺跡に後続する時期の設定を試みた。この新時期設定の前提条件として、①栗林式に後続する百瀬式併行期の時期を考慮し、それらの土器を伴うこと。②北陸系土器に新しい要素が存在すること。③県内における凹線文の波及はなかったこと、が挙げられる。これらの解明は良好な一括資料に乏しい現状では状況証拠に過ぎないが、当該期編年の手掛かりになると考える。当該期は、下谷地遺跡・小丸山遺跡を各々古相・新相に分け、小丸山Ⅱ（新相）を中期末のⅣ様式に当てる試案が提示されたが［高橋 1990］、①の条件からもう一段階設定された。以下、これらを参考に各時期の概要をまとめ、編年序列を示した（表6）。

下谷地段階

櫛描文の定着期で加飾性が高い。良好な土坑一括出土土器をこれに当てる。甕は口径が最大径で長胴のものが多い。口縁部にキザミ・押圧・綾杉状刺突、胴部に簾状文・平行線文・扇状文を施すものがある。壷は口縁が大きく外反するもの、長頸で突帯をもつものがあり、口縁端部や内面に加飾する。その他、鉢・高坏が少数ある。中部高地系では栗林式土器が出土した。

小丸山段階

櫛描文の衰退期で加飾が口縁部に集約される。包含層出土土器であるが、前段階に比べ明らかに新相を呈する土器群である。器種構成は下谷地遺跡と同じであるが、形態に変化が見られる。甕は体部最大径が胴部上半に移る。松ノ脇遺跡分類の甕Ａ・Ｂ・Ｄ類に相当する。壷は頸部が筒状を呈し、やや丸みを帯びた長胴となり壷Ｃ類に相当する。甕・壷とも口縁部に施文されるものが殆どで、斜行短線や刺突系の文様が多い。またヨコナデ調整で無文のものもある。中部高地系土器は引き続き栗林式土器が一定量認められ、活発な交流を伺わせる。

松ノ脇段階

口縁部の加飾がさらに簡素となり、端部外面のキザミあるいはヨコナデ調整で無文のものが主流となる（表2）。櫛描文技法が簡略化され刺突文系に変化したと言える。甕・壷以外の器種は明確ではないが、従来の器種構成を受け継ぐと思われる。甕Ｃ・Ｄ類はこの段階で見られ、最大径が胴部上半にあり丸く張り出している。壷は前段階以前からの器形を受け継ぐＡ・Ｂ・

畿内編年	北陸編年	北加賀	能登	越中	越後	東北	中部高地
Ⅲ様式	増山4期	寺中Ⅱ次	吉崎・次場 I-4号溝	浦田穴09	下谷地	山草荷・宇津ノ台	栗林Ⅰ
	増山5期	磯部	細口源田山	浦田溝05	小丸山		栗林Ⅱ
Ⅳ様式	西念・南新保2期	専光寺養魚場	吉崎・次場 V-1号土坑	中小泉	松ノ脇	天王山	百瀬
	西念・南新保3期	戸水B					

表6　中期後半の編年試案（久田1992一部改変）

C類があるが、やはり球形の胴部を呈する。中部高地系土器でも新・古相があるが百瀬式併行と思われる甕・壷が主体である。

以上の結果をまとめ他地域と比較すると表6のようになろう。下谷地・小丸山両遺跡の対比関係は問題ないと思うが、凹線文土器の波及・定着する戸水B式併行期をどこに求めるかに問題が残る。戸水B式併行の遺跡に中部高地系の土器が共伴しないことも影響している。

次に、東北系土器とその出土状況の検討から見た編年的位置付けについて考えてみたい。本遺跡からは一定量の天王山式土器、山草荷式の壷(39)・宇津ノ台式の甕(44)が出土した。前者は1区Ⅵ層出土、後者2つは2区Ⅵ層出土である。後者2型式は概ね栗林Ⅱ式に併行することに問題は無いだろう。問題となるのは天王山式であるが、北陸地方では中期後半の櫛描文土器に混在して出土する場合が多い。このことから開始時期を中期とする説[橋本1975]と出土状況を疑問視して後期初頭以前とする説[石川1990]がある。天王山式土器は北海道南部から石川県まで広く分布し、各地の伝統的な要素を取り入れて成立している。そのため、成立時期の実像の手掛かりになる反面、却って型式としては不鮮明にしている面もあろう。本遺跡でも他型式の要素を取り入れた土器が確認でき、12・37の頸部文様帯は宇津ノ台式の重菱形文が、2の器形には北陸系の甕が取り入れられている。また、天王山式としては認めがたいが、138には簾状文と渦巻文があり、それぞれ中部高地系と山草荷式の要素であろう。このことから、宇津ノ台式・山草荷式に近接した時期まで遡らせることは可能であるが、共伴例は確認できていない。

本遺跡の場合、1区Ⅵ層にまとまりある土器群・石器・剥片類が検出された。出土状況から一時的な生活跡[1]と考えられ、これが一つの手掛かりになろう。天王山式土器の甕(1)等は文様構成・器形などから見て古相[2]を呈し、時期差を認定できる土器も今の所見当たらない。また最も集中していたⅡB-2出土の甕(16)は中部高地系と考えられ、その周辺から出土した甕(17、18)も暗茶～黒色を呈する同一の胎土であり、天王山式土器と共伴した可能性が高い。17は緩い受け口状口縁を呈し頸部に簾状文が巡る甕で、百瀬式と考えられる。これらを前提とし、且つ後期の土器が1点もⅥ層から出土していない点も考慮すると、天王山式は中期後半の松ノ脇段階に併行、さらにはⅣ様式併行の可能性もあろう。この1区Ⅵ層土器群のまとまりを信頼すれ

ば、甕がａ類(精製土器)4点、ｂ類(粗製土器)6点の計10点、壷はａ類のみで6点となる。甕では両類が同程度となり相互が補完しあっている。壷はｂ類が確認できなかったが10の類を考慮しても多くはないだろう。甕におけるスス・炭化物の付着はａ類2点、ｂ類3点であるが、両者間に用途の使い分けは想定できなかった。

新潟県周辺の遺跡で本土器群とほぼ同時期とされる資料としては、石川県杉谷チャノバタケ遺跡、富山県江上Ａ遺跡、新潟県砂山遺跡、福島県天王山遺跡・能登遺跡などがある。このうち磨消縄文が見られるのは後3者で、福島県～宮城県以北に中心をもつ。一方、北陸地方の例では2本1組の沈線で文様を描くものが多い。口縁部は外面のみ有段状のもの、内湾するもの、くの字状を呈するものが多く、福島県の類に比べ頸部の屈曲が弱い。また、1の頸部文様体のモチーフは重菱形文に由来すると思われ、秋田県はりま館遺跡(Ｄ区)に類例がある。従って新潟県における天王山式土器には、東北地方の日本海側地域と福島方面の内陸～太平洋側地域の2ルートがそれぞれ、日本海、阿賀野川を伝って来たと想定できる。今後、時期の細分がなされたうえでこれらの特徴が地域差か時期差か検討したい。

当該期の北陸地方では、在地の櫛描文とともに中部高地系・東北系の土器を用い活発な地域間交流があったことが伺われる。しかし、中期末に加賀地方では凹線文土器の影響で在地土器に変化が起き始め、中部高地よりも近江や瀬戸内地方との接触が活発になる。一方、東北地方の天王山式土器も分布を拡大するが遺構を殆ど伴わず単独で出土し、器形・文様・縄文原体も混沌とした様相となることから、各地で安定した土器型式を維持・継続していた社会規範が何らかの異変で崩れ始めると想定されている[石井 1997]。このように、各地の人々が活発に移動し始めることが本遺跡でも確認されたことは非常に興味深いことである。

以上、確証に欠ける推察に終わってしまったが、問題点を挙げ今後の課題とする。①佐渡も含めた当該期資料の収集と器種分類の徹底、②県内における凹線文土器の有無と戸水Ｂ式併行期の解明、③天王山式土器の上限の解明、編年の整備、④本遺跡の出土状況の更なる検討、⑤中部高地系土器の検討、等である。御叱正・御批判をお願いしたい。

補注

(1) 福島県天王山遺跡・能登遺跡等では甕・壷の外、注口などの小型土器・台付鉢・紡錘車・各種石器類が出土し明確な遺構を伴わないものの、その豊富さから一定期間の定住が考えられる。一方、本遺跡の場合は調査範囲が狭く確信は持てないが、少なくとも1区Ⅵ層の遺物群は甕・壷・石器と最低限の生活用具であることから本文のように判断した。

(2) 古相としたものは田中靖氏の分類[田中 1990]によれば、Ａ群とされるものである。頸部が筒形で球形の胴部を持つ壷や有段口縁の甕等があり、磨消縄文・口縁部の突起・キザミ・縦走縄文等が多用される。各部位は器形的に明確に別れ、頸部の境界は鋸歯文等の区画文によっても区別されている。後続するＢ群はこれらの特徴が退化傾向にある。後期後半主体の新津市八幡山遺跡等で確認される。一部、福島県の踏瀬大山式に併行する。

参考文献

秋田県教育委員会　1993『はりま館遺跡発掘調査報告書』

石井　淳　1997「東北地方天王山式成立期における集団の様相－土器属性の二者－」(上)、(下)『古代文化』第47、49号　古代學協會

石川日出志　1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第３号

大越道正ほか　1990「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書』10　福島県文化センター

久々忠義　1982「江上Ａ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告書：上市町土器・石器編』

楠正勝ほか　1989『金沢市西念・南新保Ⅱ』　金沢市教育委員会

群馬県考古学談話会　1986『第７回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』

品田高志　1985『刈羽大平・小丸山』　柏崎市教育委員会

高橋　保　1979『下谷地遺跡』新潟県教育委員会

高橋　保　1990「県内の弥生中期の土器」『新潟考古学談話会会報』新潟考古学談話会

田中　靖　1990「北陸における天王山式期の現状と課題」『「天王山式期をめぐって」の検討会』　弥生時代研究会

田中　靖　1988「北陸における天王山式系土器」『新潟考古学談話会会報』第２号　新潟考古学談話会

坪井清足　1953「福島県天王山遺蹟の弥生式土器」『史林』36－1

栃木英道ほか　1995『谷内・杉谷遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター

中村五郎　1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』

橋本澄夫　1975「入門講座・弥生土器－中部：北陸２」『月刊考古学ジャーナル』107　ニューサイエンス社

橋本澄夫　1975「入門講座・弥生土器－中部：北陸３」『月刊考古学ジャーナル』109　ニューサイエンス社

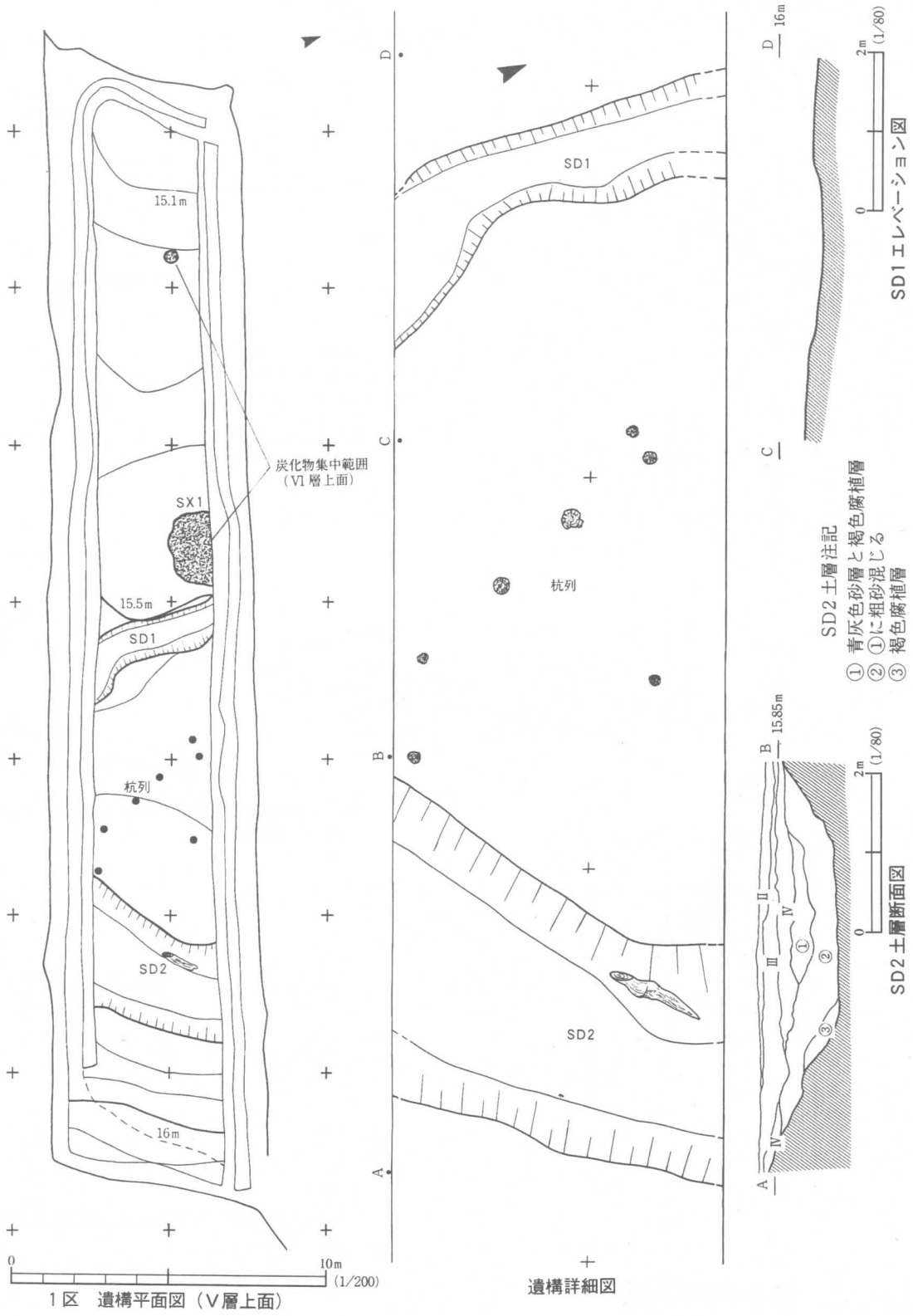
久田正弘　1991「能登における弥生時代中期の一様相」(1)、(2)『石川考古学研究会々誌』第33、34号　石川考古学研究会

増山　仁　1988『金沢市磯部運動公園遺跡』　金沢市教育委員会

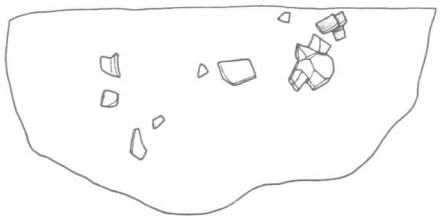
増山　仁　1989「小松式土器の再検討－小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理をとおして－」『北陸の考古学』Ⅱ　石川考古学研究会

増山　仁　1992『専光寺養漁場』　金沢市教育委員会

和島村　1996『和島村史』資料編Ⅰ　自然　原始古代・中世　文化財

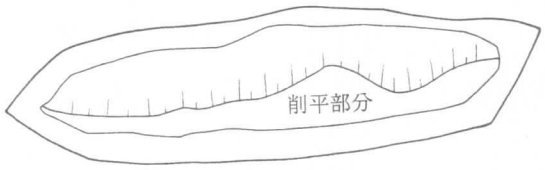

15.1m
炭化物集中範囲
（VI層上面）
SX1
15.5m
SD1
杭列
SD2
16m
0
10m
(1/200)
1区　遺構平面図（V層上面）
D
C
B
A
SD1
杭列
SD2
遺構詳細図
D　16m
C
0
2m
(1/80)
SD1エレベーション図
SD2土層注記
① 青灰色砂層と褐色腐植層
② ①に粗砂混じる
③ 褐色腐植層
B　15.85m
A
II
III
IV
①
②
③
0
2m
(1/80)
SD2土層断面図

調査区実測図（2）



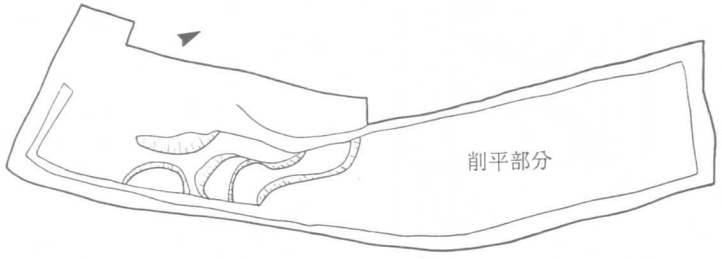
0　20cm (1/40)

SX1



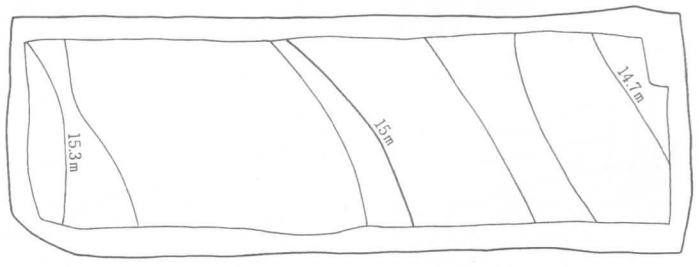
0　10m (1/200)

3区　平面図



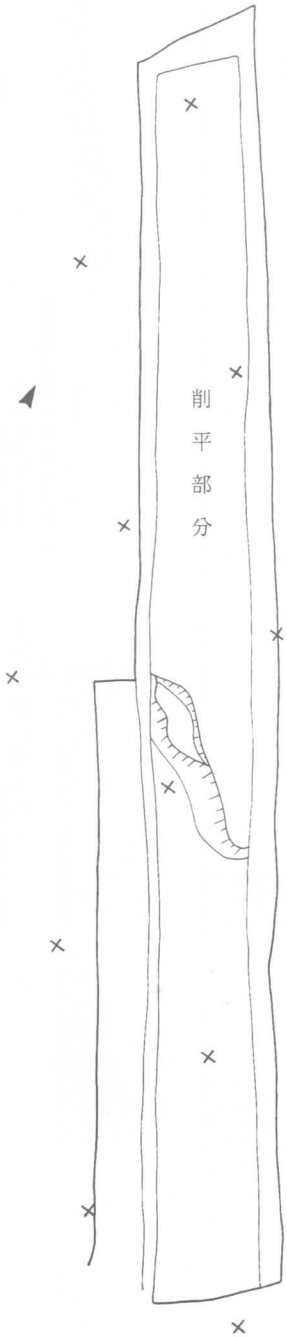
0　10m (1/200)

4区　平面図



0　10m (1/200)

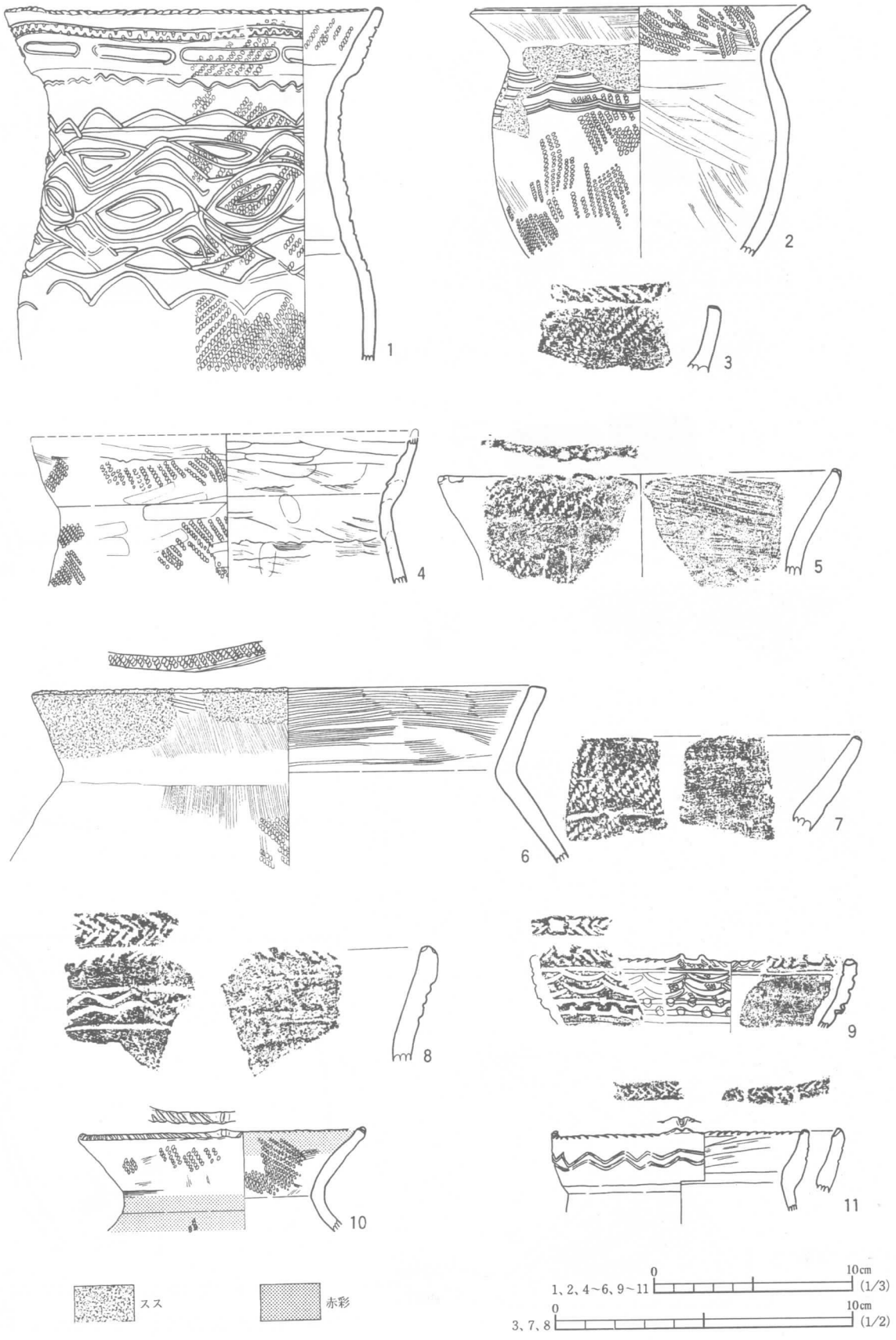
5区　平面図



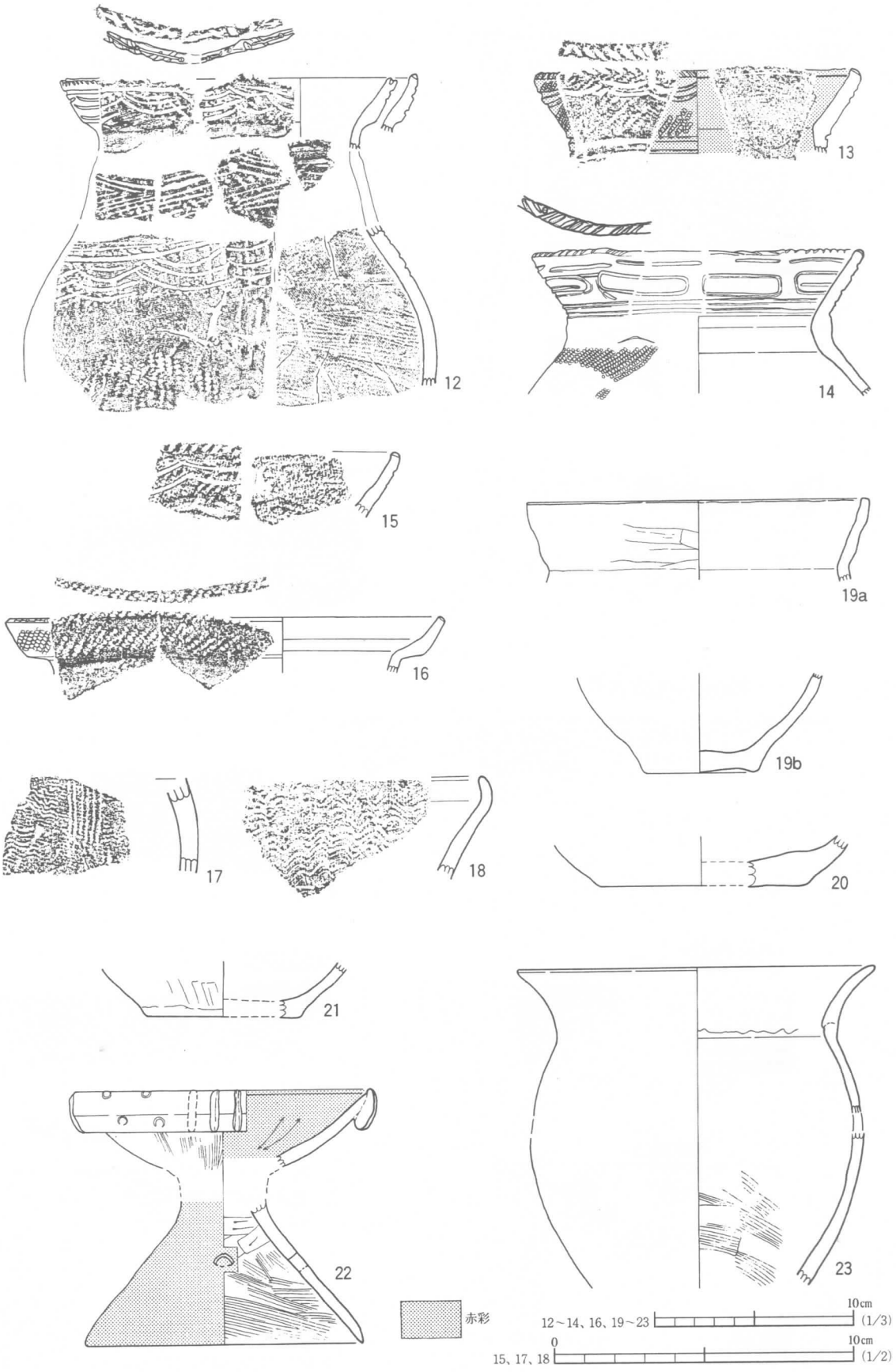
0　10m (1/200)

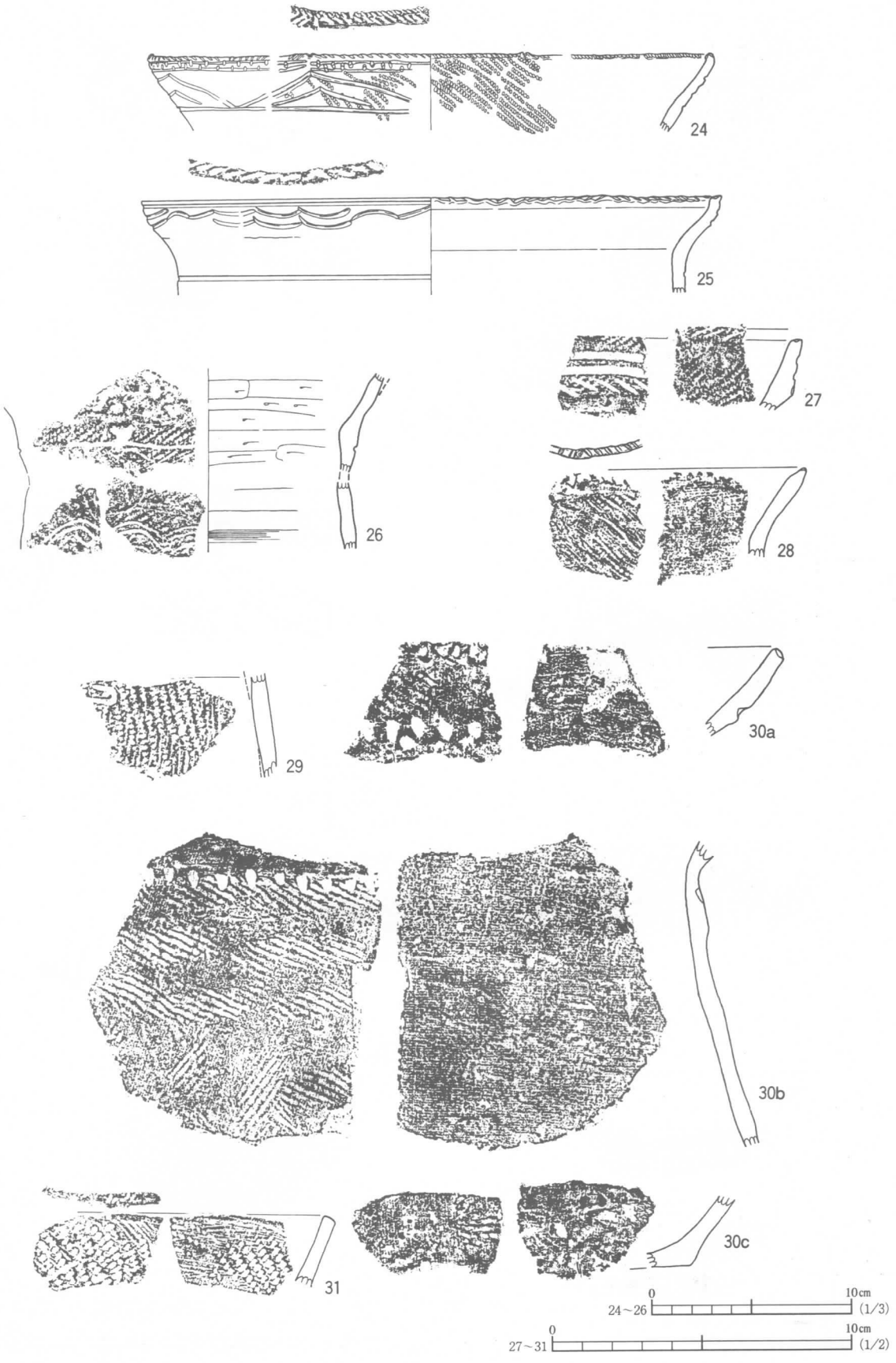
2区　平面図

1区出土土器（1）

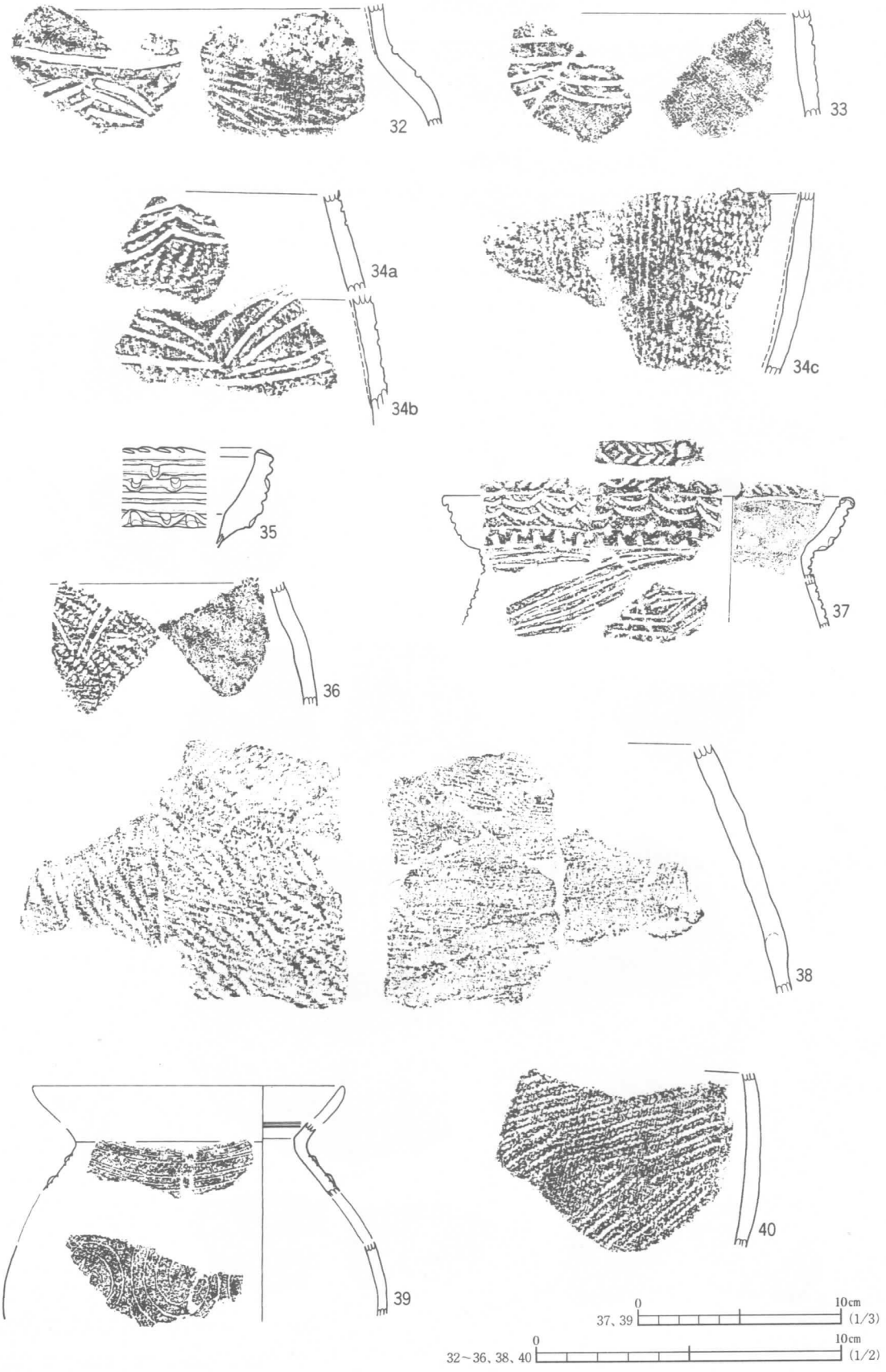


1 区出土土器（2）

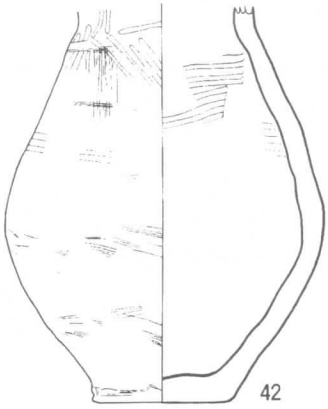

12
13
14
15
16
17
18
19a
19b
20
21
22
23
赤彩
12～14、16、19～23
10cm
(1/3)
15、17、18
0
10cm
(1/2)

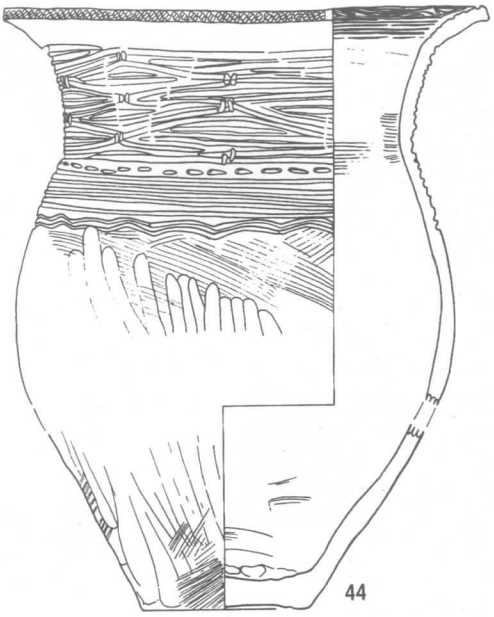

24
25
26
27
28
29
30a
30b
30c
31
0
10cm
24～26
(1/3)
0
10cm
27～31
(1/2)

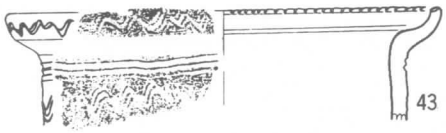
2 区出土土器（2）

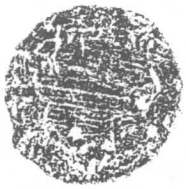

32
33
34a
34b
34c
35
36
37
38
39
40
0
10cm
37、39
(1/3)
0
10cm
32～36、38、40
(1/2)

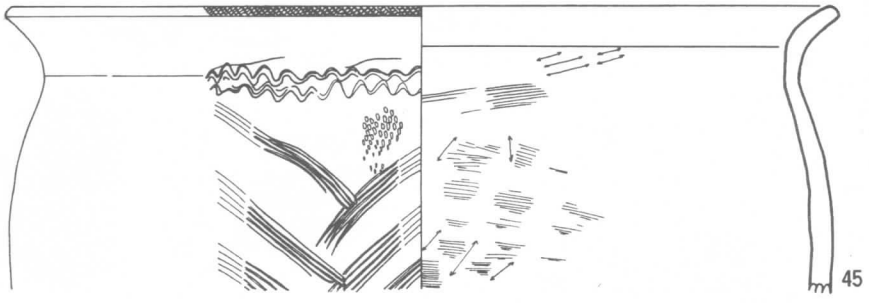
41


42


44

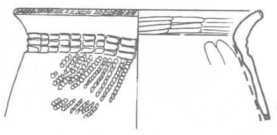

43

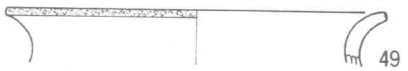


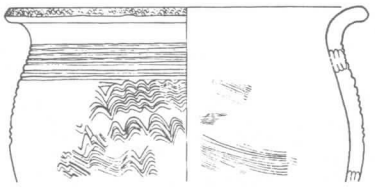

45

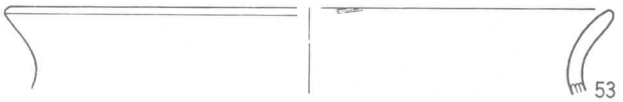
0
10cm
42～45
(1/3)
0
10cm
41
(1/2)

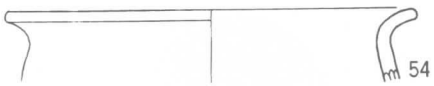
2区出土土器（4）

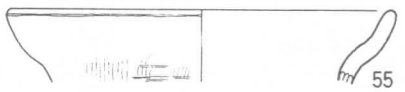


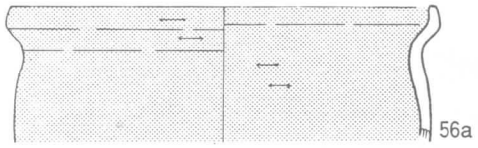


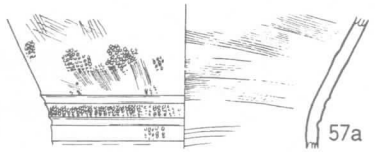


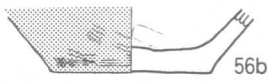


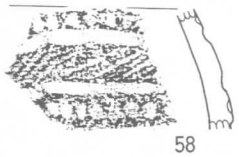


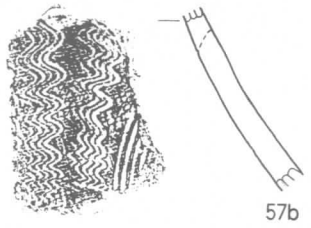








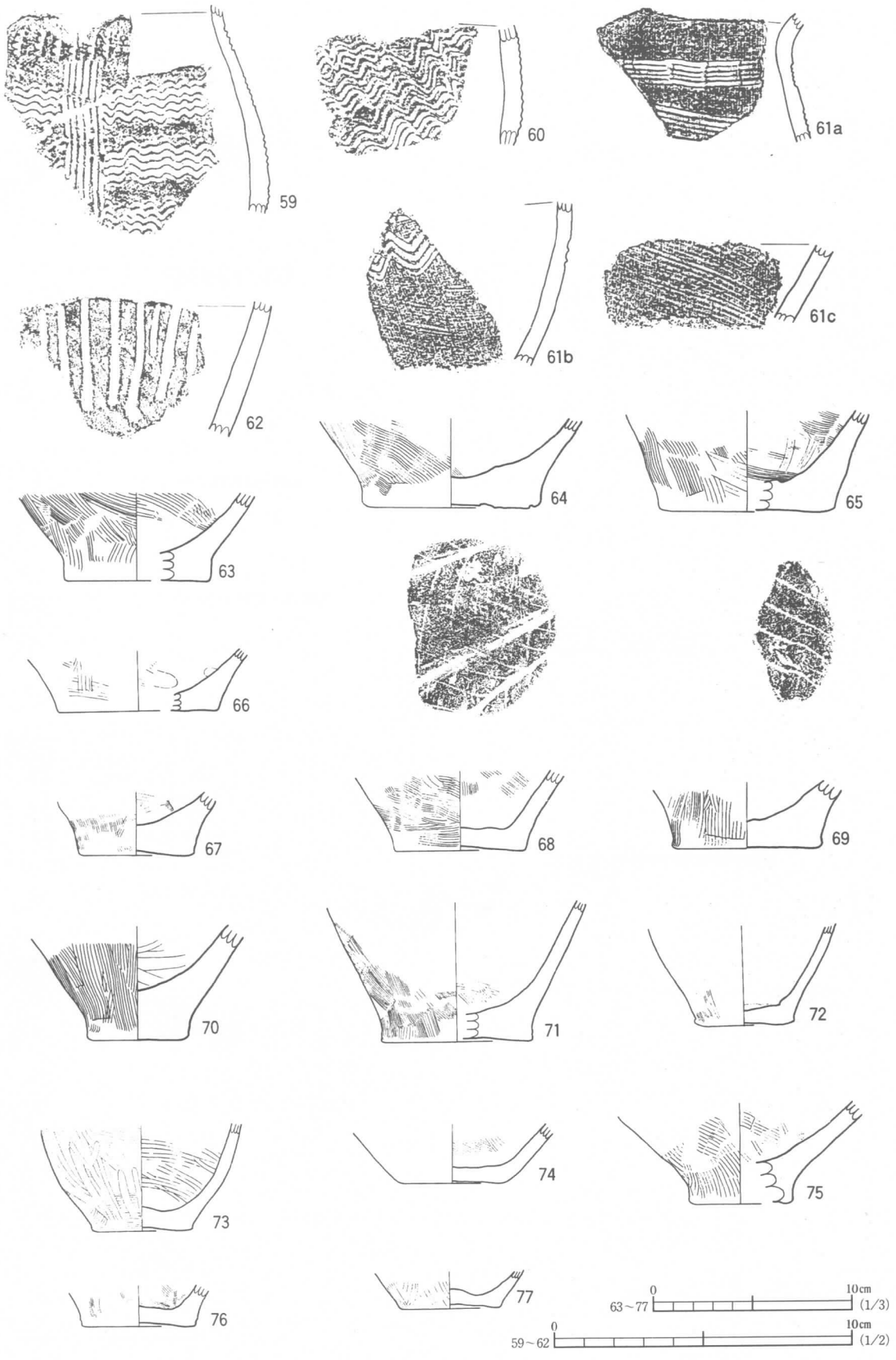




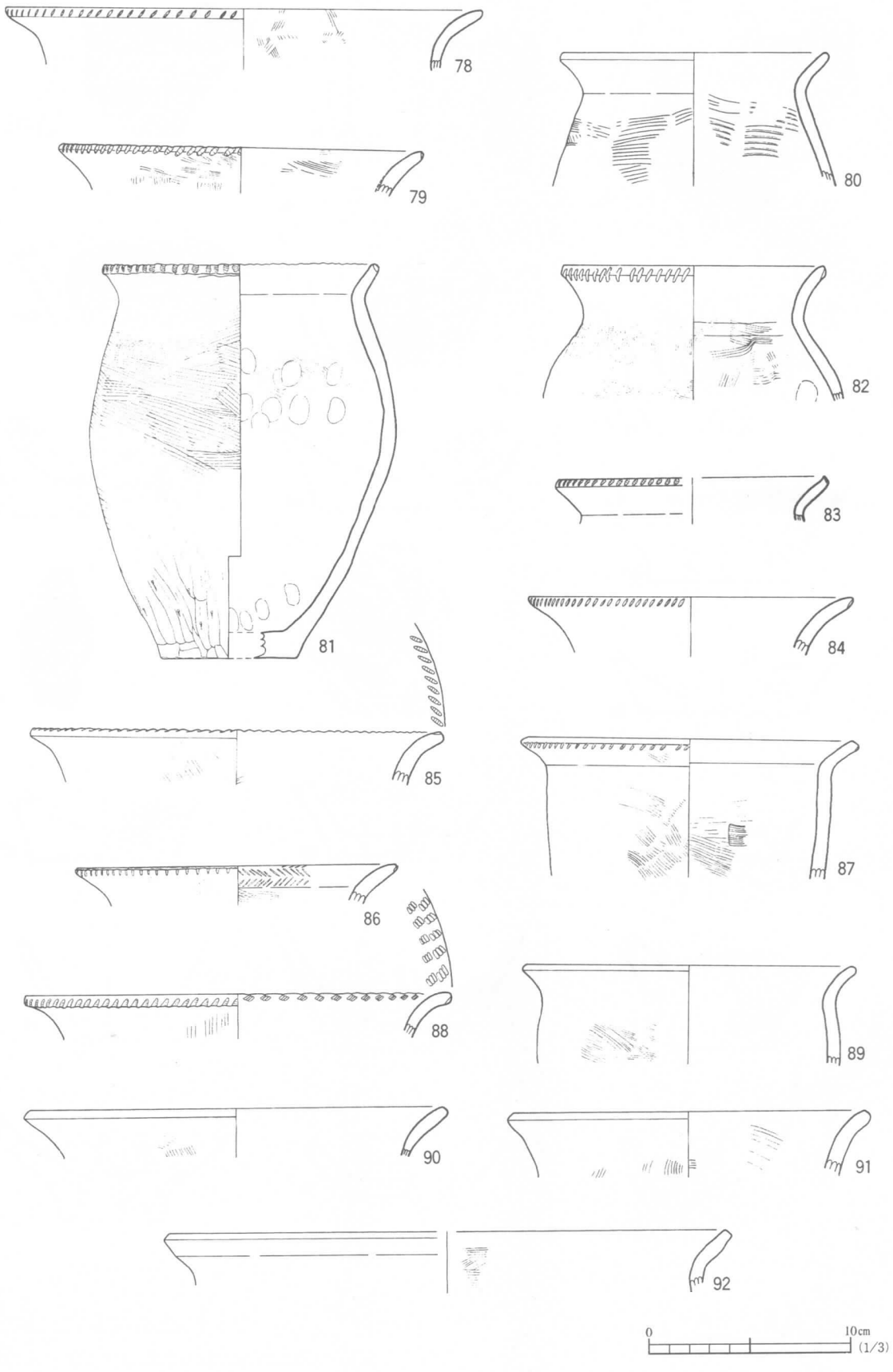
赤彩

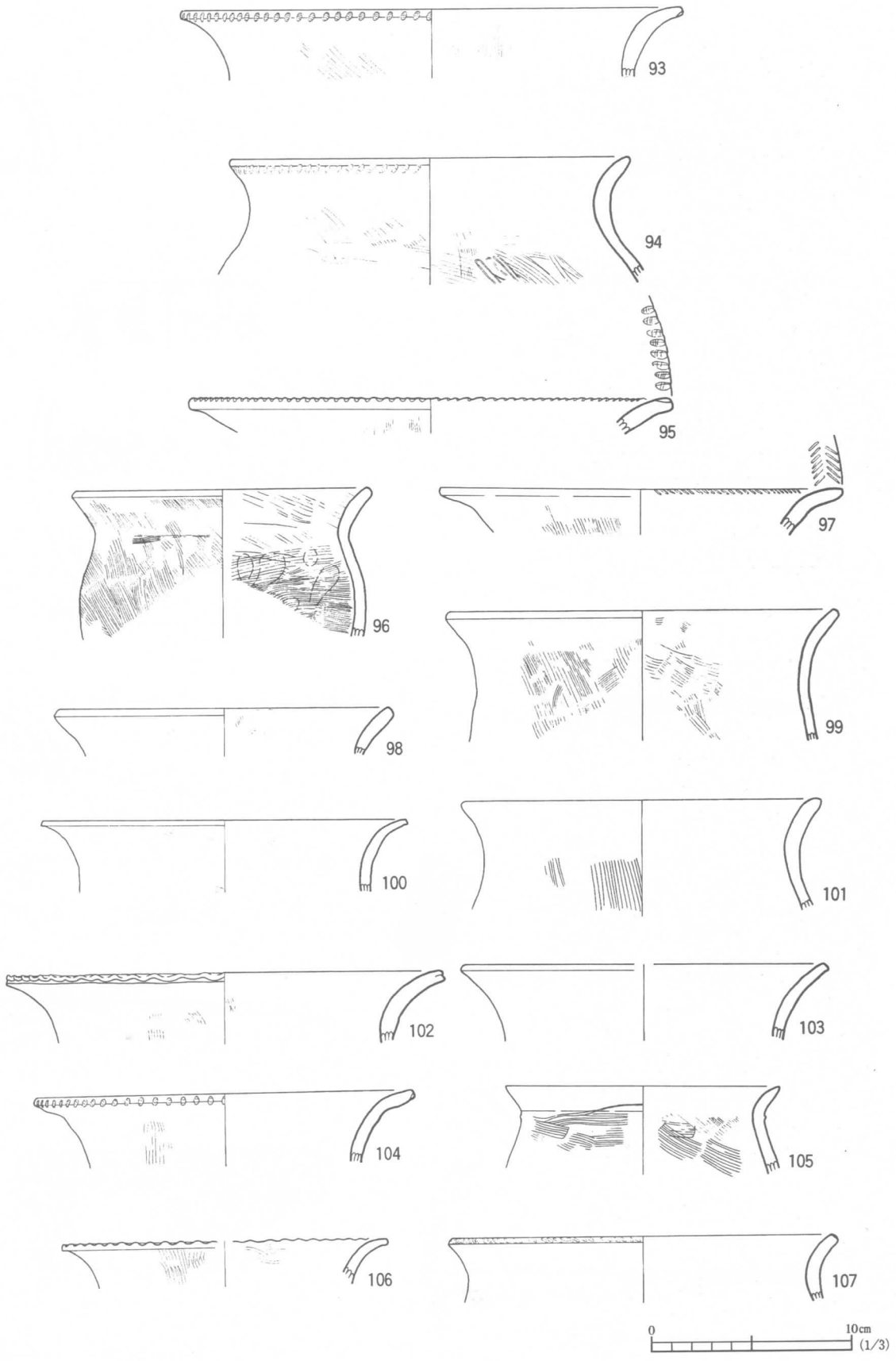
46～57a 0 10cm (1/3)

57b、58 0 10cm (1/2)

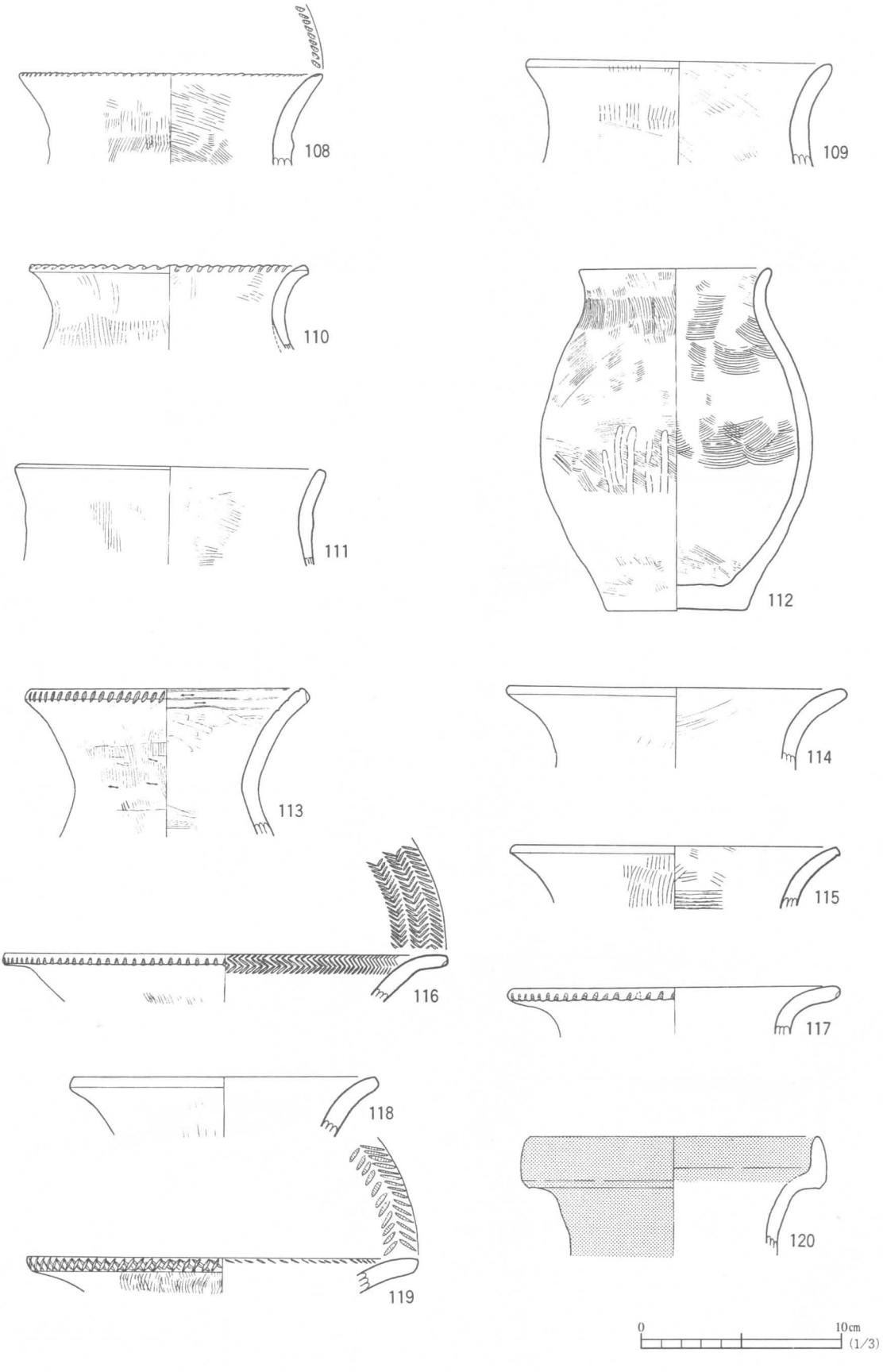

59
60
61a
61b
61c
62
64
65
63
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
0
10cm
63～77
(1/3)
0
10cm
59～62
(1/2)

2区出土土器（6）

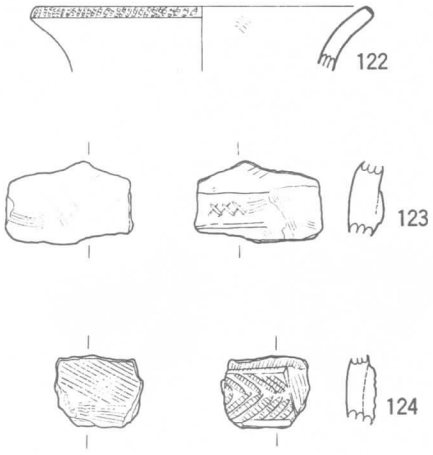


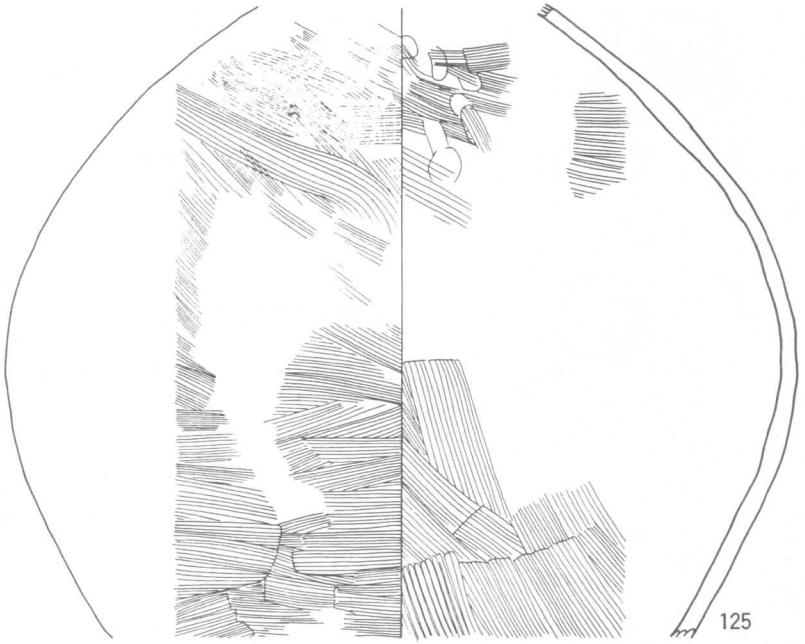

93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
0
10cm
(1/3)

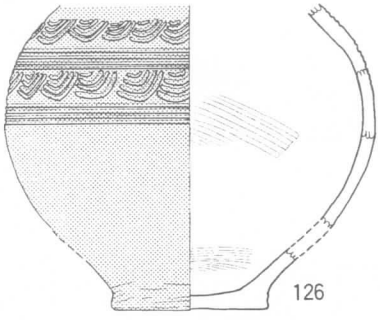
2区出土土器（8）



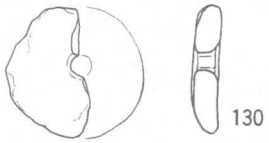
121

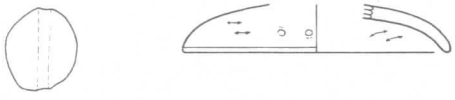

122
123
124

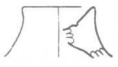

125


126

129


130


131
132
133

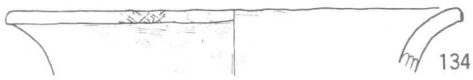

127

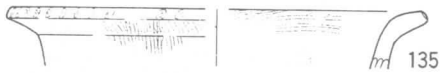
128

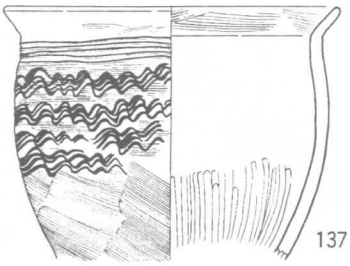
121、122、125～129、132、133　0　10cm　(1/3)

123、124、130、131　0　10cm　(1/2)

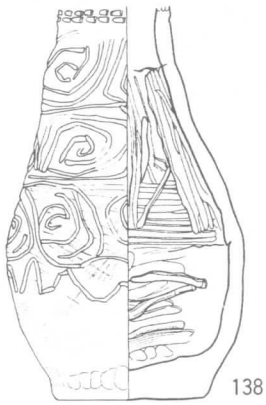
3・4区出土土器

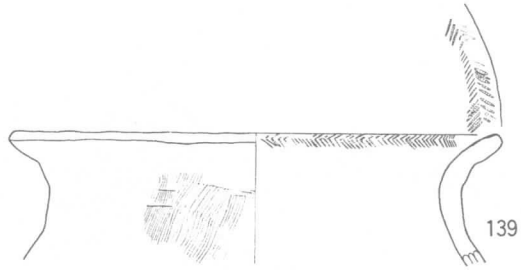


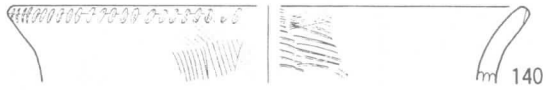


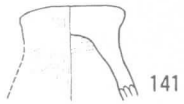


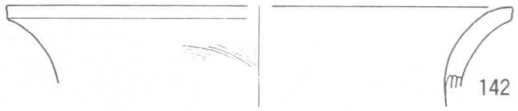
（3区）

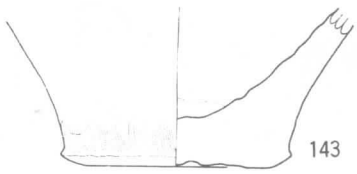




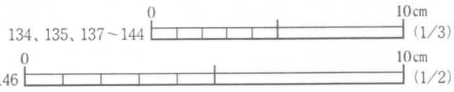


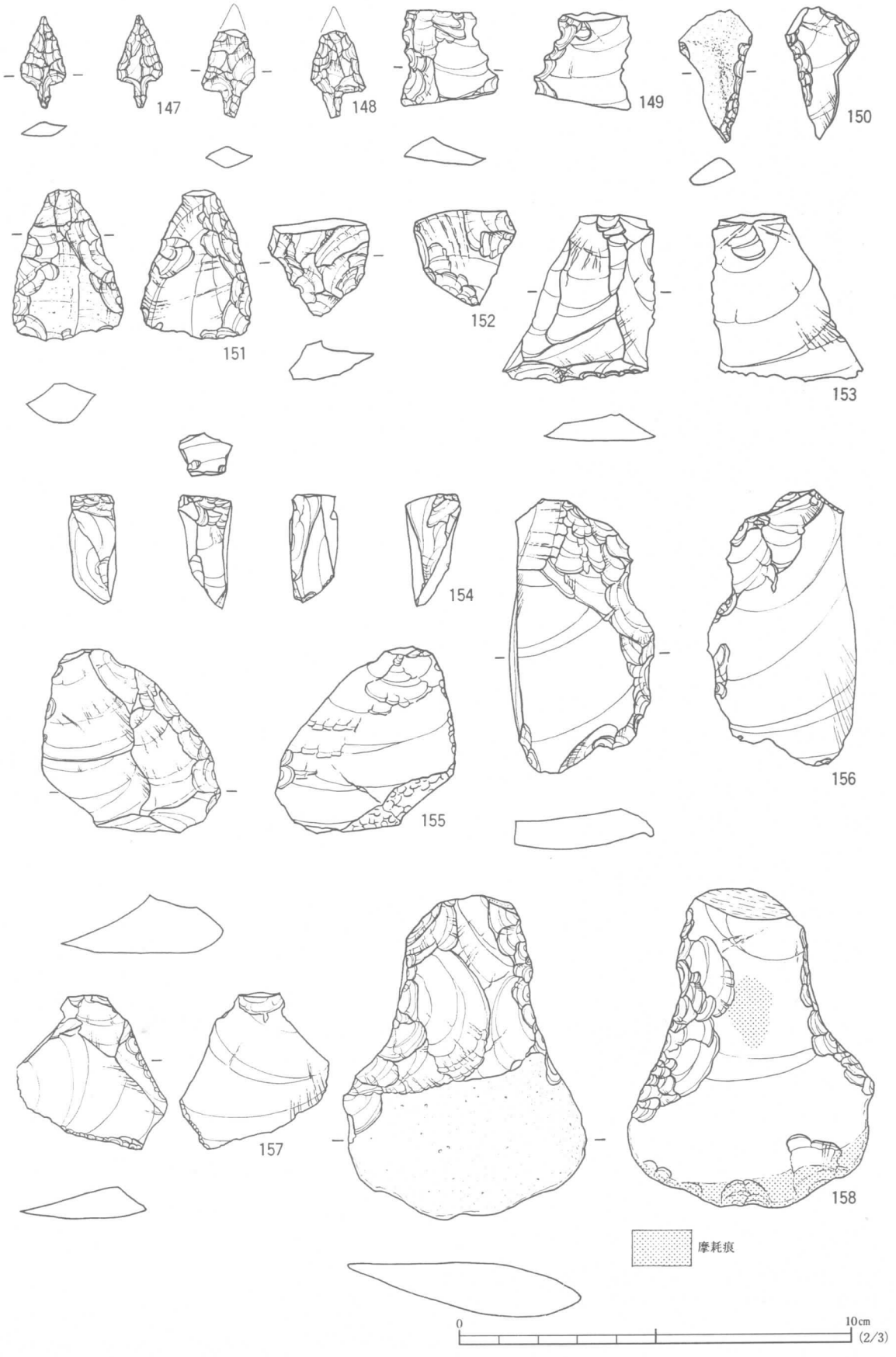






（4区）



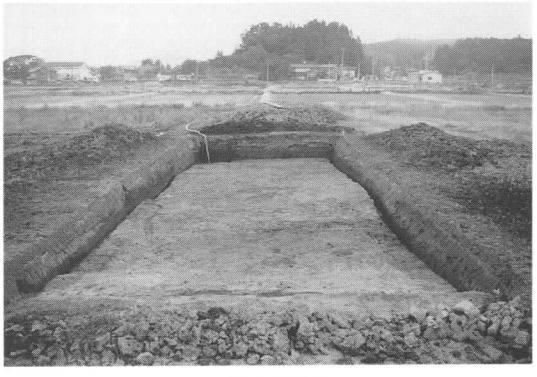

147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
摩耗痕
0
10cm
(2/3)

遺跡遠景(遺跡は中央丘周辺)

2区完掘状況

3区完掘状況

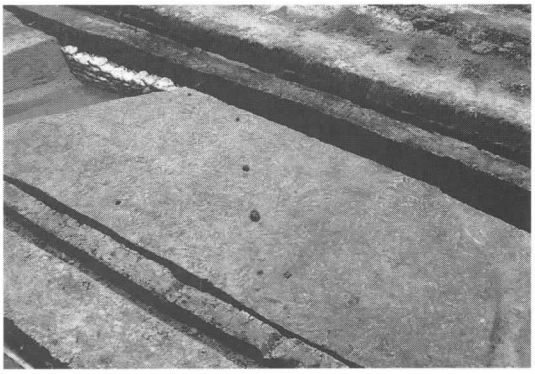
4区完掘状況



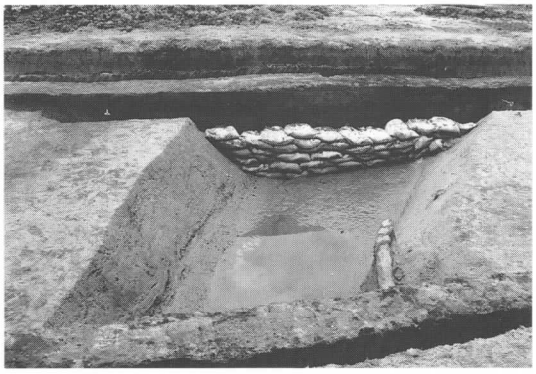
5区完掘状況

1区全景（Ⅴ層確認面）

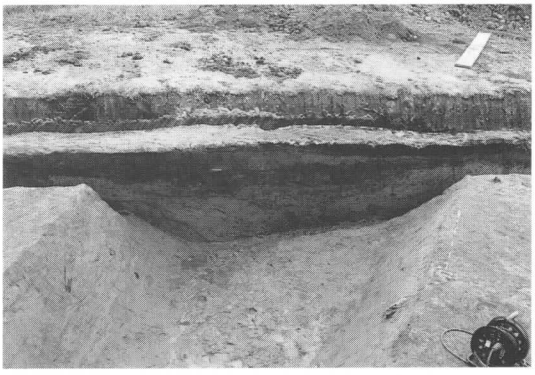
SD1



杭　列



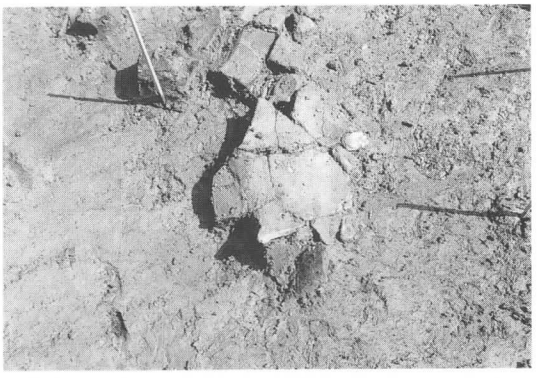
SD2



SD2土層断面

1区完掘状況

IIB-2周辺 遺物出土状況



遺物出土状況(1)

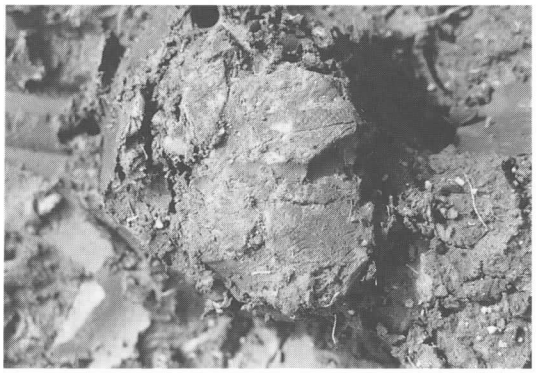
炭化物集中部分(IIB-16)

1区 土層断面

2区

2区Ⅵ層遺物出土状況

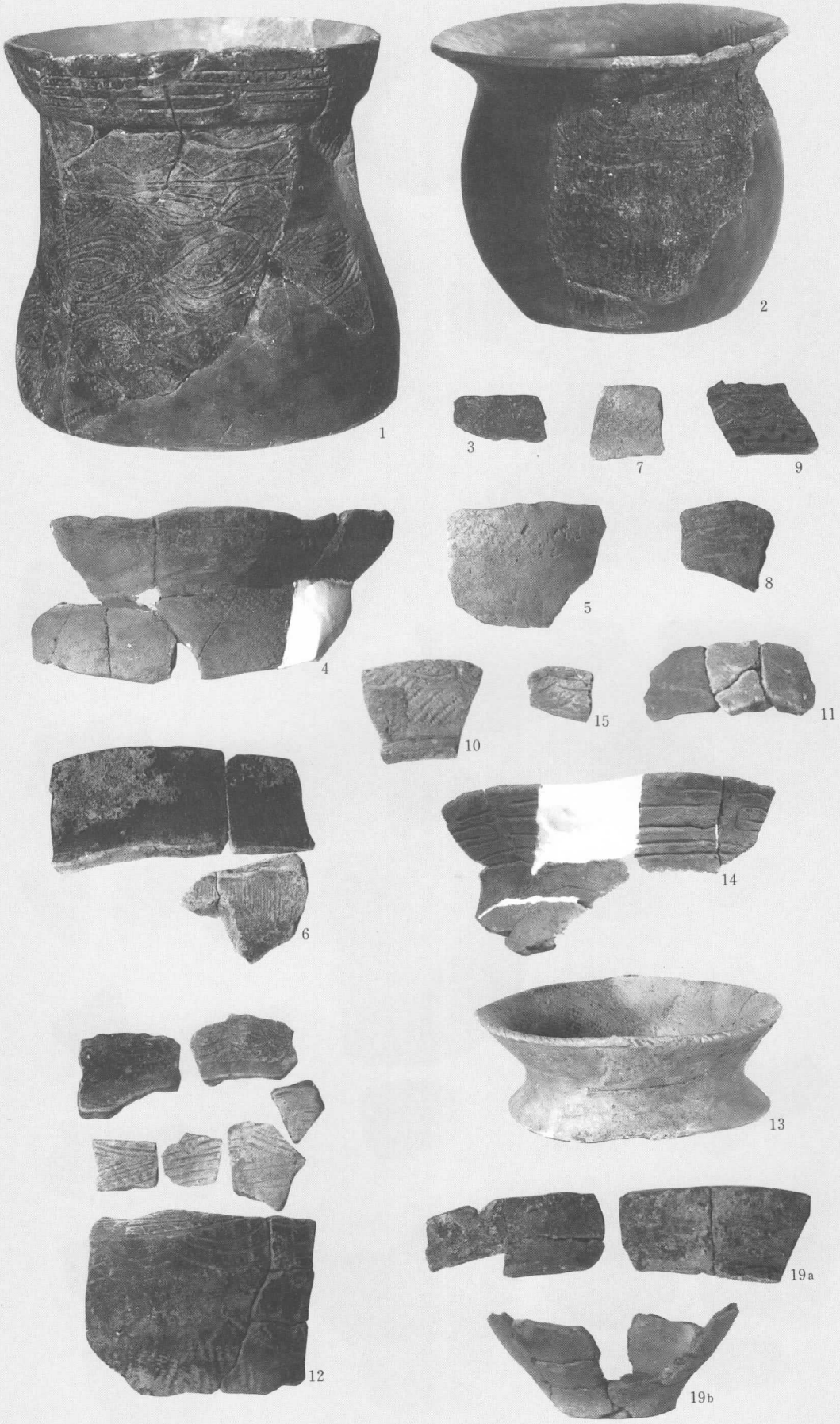
遺物出土状況(44)



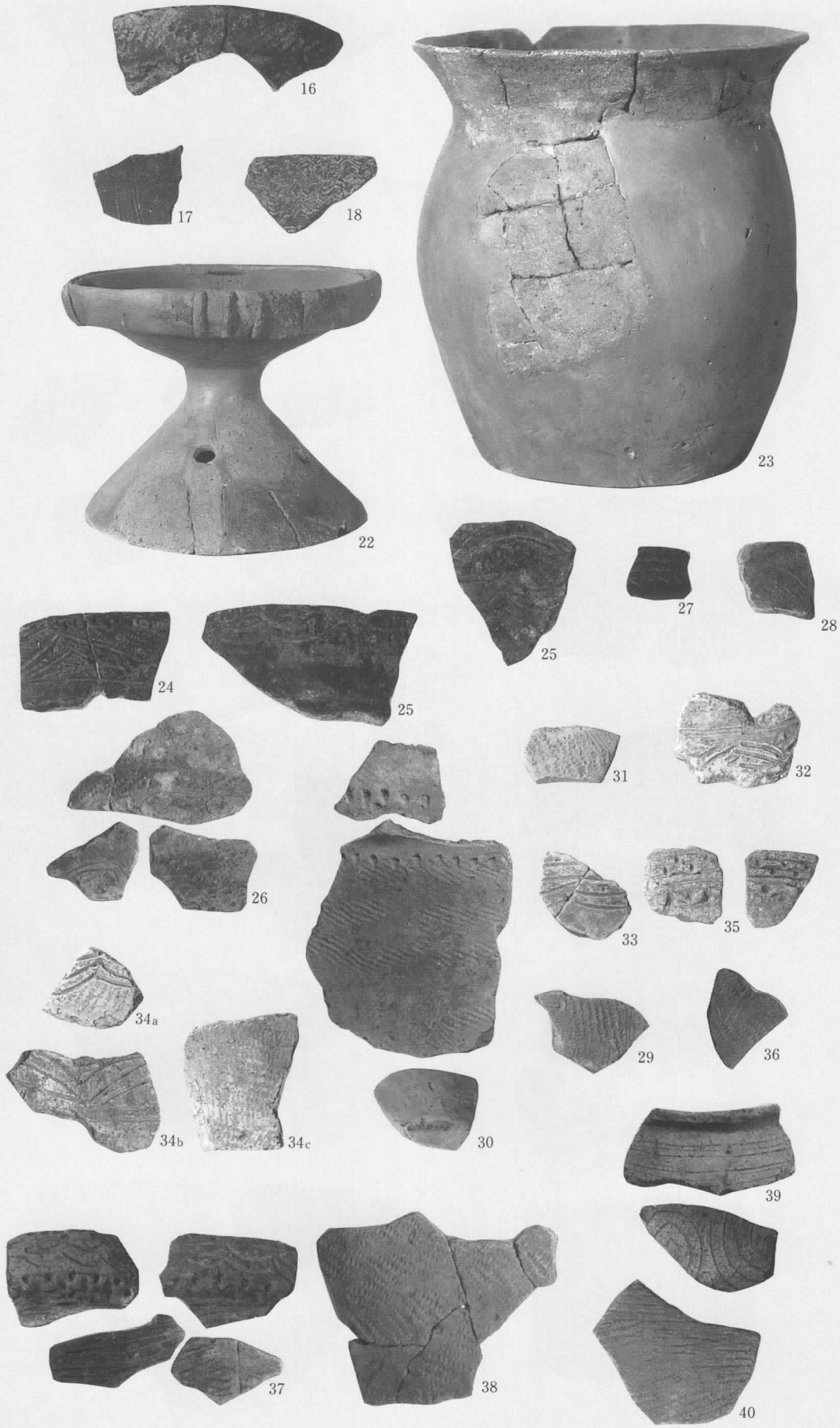
遺物出土状況(26)

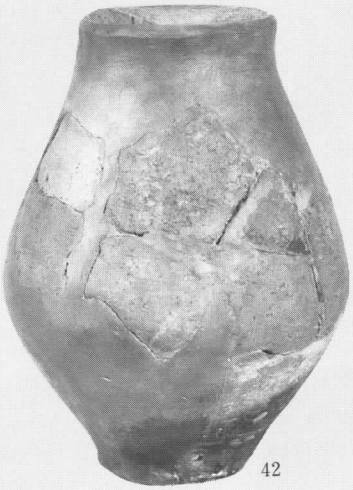
遺物出土状況(46)

遺物出土状況(中央112)

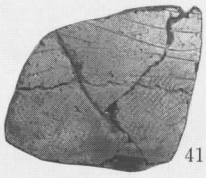

1
2
3
7
9
4
5
8
10
15
11
6
14
13
12
19a
19b

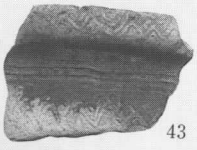
出土土器（2）

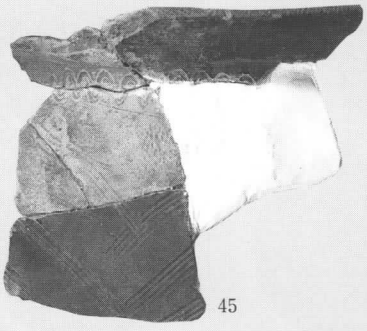

16
17
18
23
22
25
27
28
24
25
31
32
26
33
35
34a
29
36
34b
34c
30
39
37
38
40

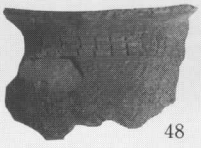

42

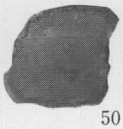
44


41

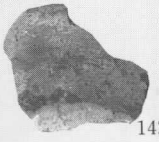

43


45

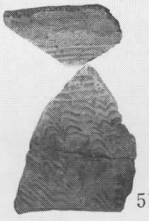

48


50

55


142

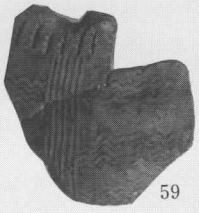
53

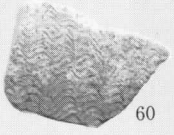

51

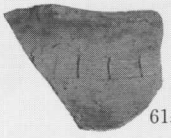
46

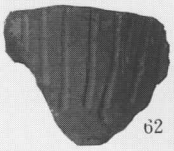
54

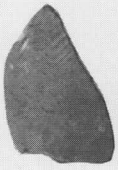
58


59

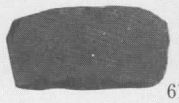

60

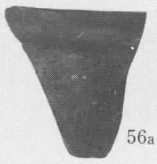

61a

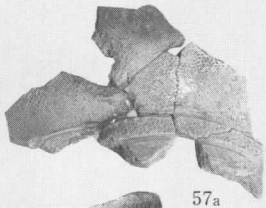

62

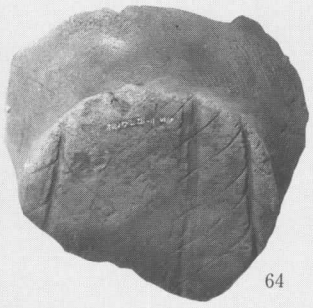

61b

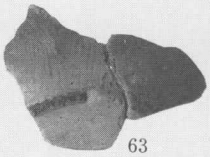
出土土器（4）

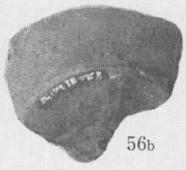

61c

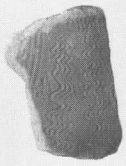

56a

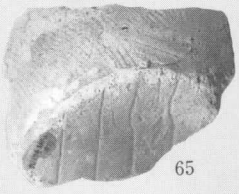

57a

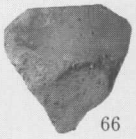

64

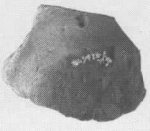

63

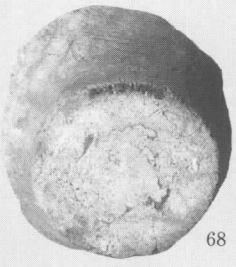

56b

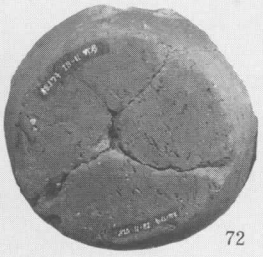

57b

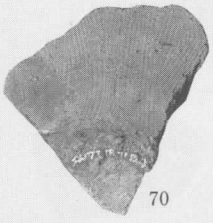

65

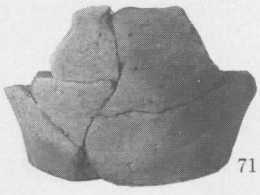

66

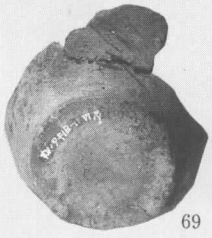

67

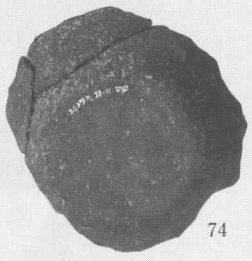

68

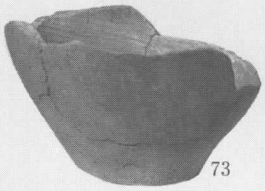

72

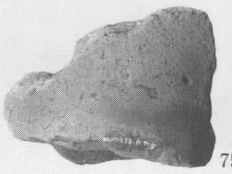

70

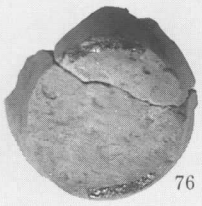

71


69


74

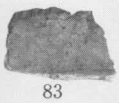

73

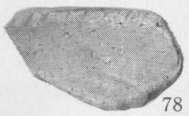

75


76

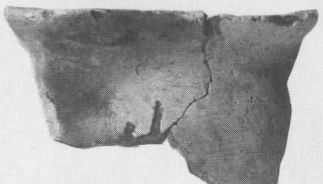
77

79


83

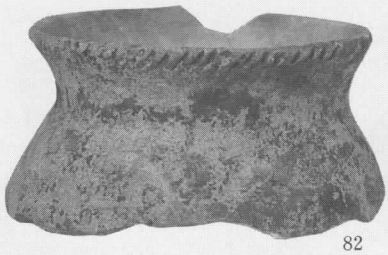

78

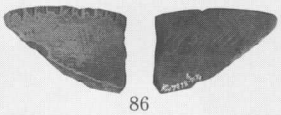
81


80

84

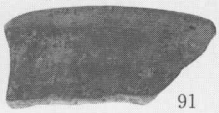
85

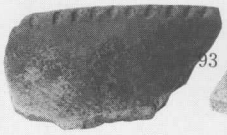

82

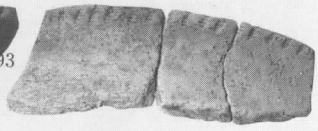

86

92

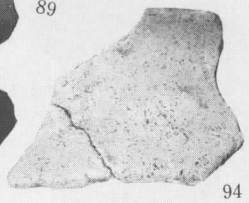
88

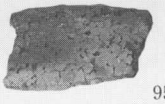

91

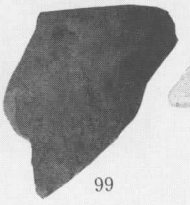

93

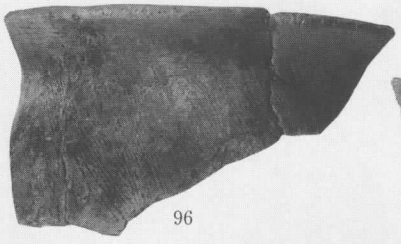


89

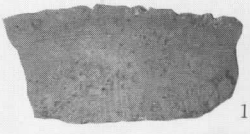

94

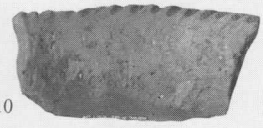

95

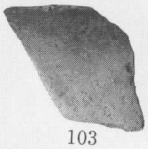

99

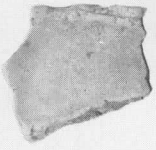

96

106

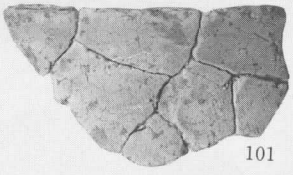

110

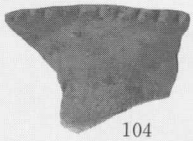


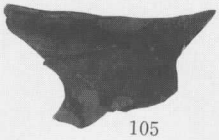

103



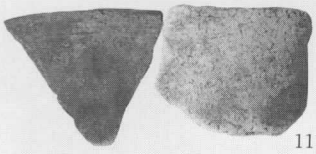
102


101

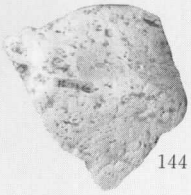

104


105

108

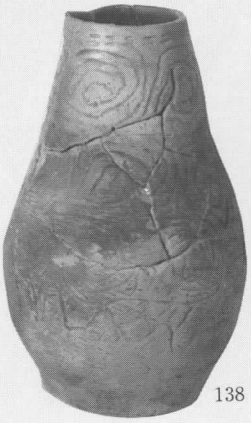

111

137


144

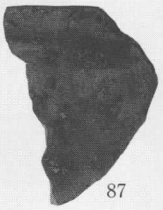
140

143


138

出土土器（6）

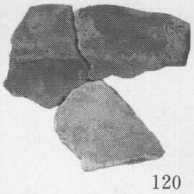
110

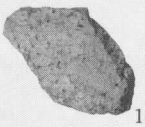

87

112

118

119

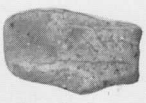

120

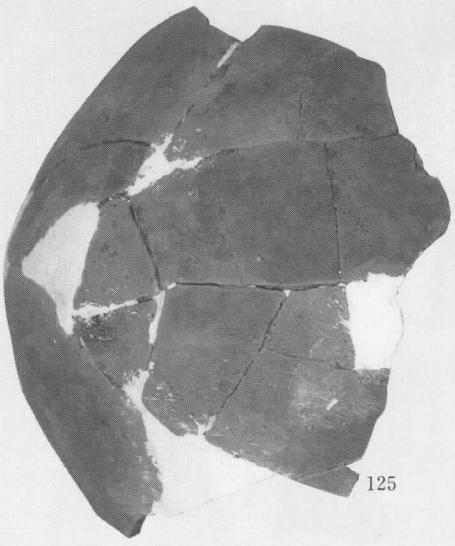

117

90

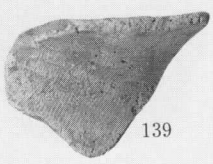
121

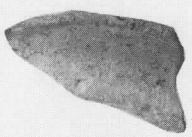
123


124

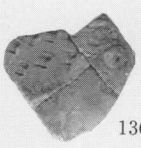

125

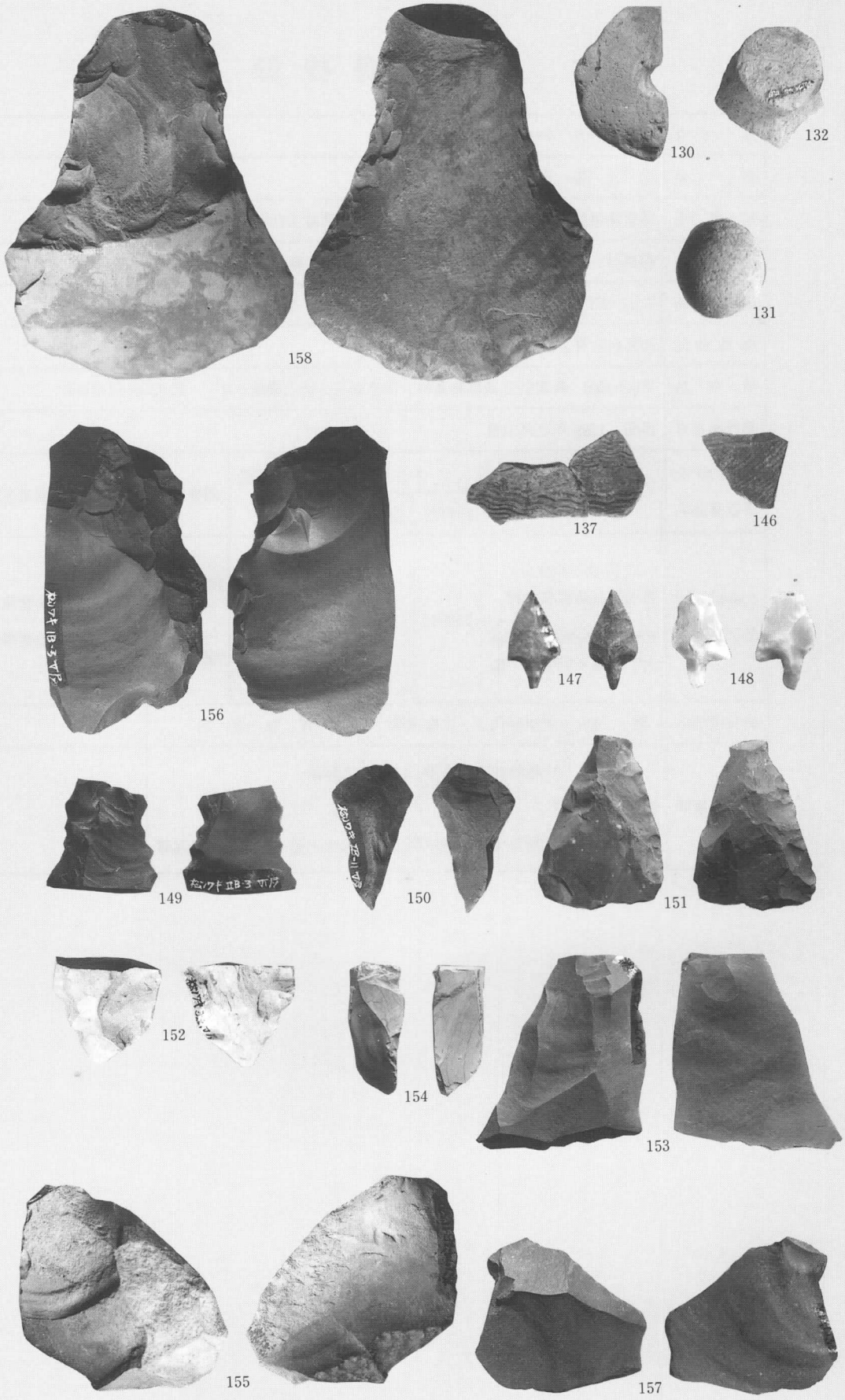
126


139


134

132


136


158
130
132
131
156
137
146
147
148
149
150
151
152
154
153
155
157

報 告 書 抄 録

ふりがな	まつのわき　いせき
書　　名	松　ノ　脇　遺　跡
副　書　名	県営圃場整備事業(桐島・桐原地区)に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	和島村文化財調査報告書　シリーズ番号　第6集
編著者名	丸山一昭
編集機関	和島村教育委員会
所　在　地	〒949-4500　新潟県三島郡和島村大字小島谷3434番地－4　　TEL 0258-74-3111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
まつのわきいせき 松ノ脇遺跡	にいがたけんさんとうぐんわしまむら 新潟県三島郡和島村 おおあざさんぜがやあざまつのわき 大字三瀬ヶ谷字松ノ脇	154041	10	37° 34′ 47″	138° 47′ 28″	1997.5.29 ～ 1997.7.25	約800㎡	県営圃場 整備事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	
松ノ脇遺跡	遺物包含地	古墳時代 弥生時代	溝2本 杭列 性格不明遺構	土師器 弥生土器・石器・土製品等	

和島村埋蔵文化財調査報告書第６集
県営圃場整備事業（桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

松ノ脇遺跡

平成10年３月25日印刷　発行　新潟県和島村教育委員会
平成10年３月31日発刊　印刷　三条印刷株式会社
新潟県三条市元町９番３号
電話（0256）32－2281㈹